

第八章 ソ

連

日支事変の根源は、ソ連の世界共産主義革命、即ちソ連の世界共産主義制覇のための一手段として日本と支那とを相争わせるため蔣介石を使喚して戦争を起こし、支那を積極的に支援するかのように装い、最終的には、日本と利害が最も対立するアメリカを、主戦場に向わせるように、永年綿密に計画し、行われた政略戦争であつた。即ち世界共産主義革命政策の一環であつたのである。このことを主動的位置にあつたときの日本は、明確に読みとることができたため、中国よ目覚めてくれ、日支が争うことになれば両国の存立のみか、東洋は戦乱の巷となり、悲惨の極に至ることは明白である、と、あらゆる手段、方法をもつて、その理解を促し、その覚醒を求め続けた。しかし、使喚する言は、世界戦争に至るには必然であるが、その暁には、日本は必定的敗北する、そのときこそ、支那は完全独立宣言を行い得るときであると陰に陽に蔣介石を支援し、中国共産党を育成して、最終戦まで両国が臨まざるを得ないように策謀したのが今次大戦であつた。我国の言は違わず、両国の不幸は必然的に訪れ、戦勝国である中華民国はその殆んどの版図を共産党治下に委ねる国家に変貌し、骨肉相争う革命の悲劇を経て、勝利に翩翻たるべき青天白日旗もその映影なく、鎖と鎌の赤旗たなびく共産政權が大陸を闊歩するのである。日本もまた有史以来の無条件降伏という汚名を額に押しつけられたのである。一つの国、一つの民族が撃滅され、屈伏し、その外

国軍隊により本国が占領されること程、悲惨、悲劇はない。この教訓を生かさないうで生き残った民族があり得るか。

光輝ある歴史と伝統を誇る日本が何故城下の誓をしなければならなかったのか。痛憤の極み。いまその経緯をたどり、明らかにして、勇奮力闘して下さった幾多の英霊に、傷ついた勇者に、又諸先輩に、この一文を捧げたいのである。

それではソ連とはどんな国であったのか。ロシアソ連人は非常に疑い深く、何事にも警戒的で、自分だけを頼りとし、自分の力が優位でないときは力不足を狡猾さで補うという習性を身につけ、今日世界のどこの民族も経験したことのない試練に生き残って来た民族であるといつても過言ではない。

こうした民族的な不安感を生み出したのは、又、地勢的なものでもある。それは全歴史を通じてロシア人はロシアソ連を守る防衛に役立つ自然の障壁がなかったからでもある。そのため、ロシアソ連では絶えず周囲民族からの侵攻と破壊が繰り返されていた。即ち、紀元後間もない頃から、モンゴル遊牧民は何回となくスラブの定住地域を侵攻し、殺戮と破壊を繰り返したのを初めとし、四世紀後半のフン族の民族大移動、ブルガリア人やタタール人の侵略など多数の異民族の侵攻を受け、その度にスラブ人の定住区は破壊され、焼き尽されたのである。

九世紀に生き残ったスラブ人によって最初のロシア国家が形成されたが、これまたヴァイキングの西北からの侵攻、十三世紀に至るジンギスカンの率いるモンゴル民族に最大の侵略を受け、曝された首都キエフは文字通り破滅し、その後二世紀間ロシア人はモンゴル人の支配下にあった。この間にキエフの北方で

モスコイ公国が形成され、イヴァン大帝によってモンゴル人の支配から、離脱することができたのである。イヴァン大帝以後のロシアは一転して拡張主義の局面に入った。即ち周辺民族国家への侵略、争奪併合である。それは十五世紀の末からであるが、四周に自然の防衛線を欠いた民族の本能的な「防衛的拡張」の動きでもあった。国家の心臓部をも幾度か他民族の侵略によって破壊しつくされた民族が生き残るためには、その緩衝地帯を外へ外へと求め拡大して行くより外に手段がなかったのもあろう。

この拡張主義の過程においてすら、十六世紀後半のクリミヤのタタール人によるモスコイ占領、十七世紀の初めポーランド軍によるモスコイの占領と焼却。スウェーデン軍の占領が続いているポーランド軍撤退のあとに誕生したロマノフ王朝のロシアも、スウェーデン人、トルコ人との長い戦争が続いた。一八二二年にはナポレオンのフランス軍がロシアを侵略し、焦土と化したことは有名である。

こうした時にも寸刻の弛みと揺らぎを制してその拡大主義は硬軟の攻勢によって、ロシアの版図を東はシベリアを越え、太平洋岸まで至り、南は黒海岸へ、西はバルト海沿岸へと拡大して行つたのである。

こうした攻撃拡大政策の中にありながらも二十世紀には二度に亘つてドイツ軍の侵略を受けた。何故か。自国の力が絶えず優位でない限り国家と民族は不安感に襲われる国民性でもある。故に絶えずその少しの間隙を求め、口実をもって（それが本能的な狡猾だと非難されようがされまいが）自己の安全圏を造形しようとすることは今尚変りはない。この民族的意識が絶えず周囲に又敵国を造形していることにもなるのである。特に今次大戦において二千万人の犠牲者（死者七百万人）を出しながらも、東欧をその支配下に置きバルト三国を併呑し、帝国の版図をさらに拡大することを忘れていないのである。こうした苛酷な歴

史的体験から国民性となつた自己防衛の本能は、一度入手したものを手放すことは安全保障圏の連鎖反応的な瓦礫に連なると本能的な恐怖心を覚えるのであつて、アフガニスタンの侵略も我北方領土の不法占拠もロシア的自己防衛のルールを適用することによるのであろう。

こうしたロシア人固有の対外的行動様式は彼ら自身は極めて自然な防衛本能の発動に過ぎないというだろうが、周辺地域の諸国民にはそれはロシアソ連の歴史的な拡張主義の運動としか映らないのである。大正六年（一九一七年）革命以後のクレムリンの新しい指導者達のいわゆる「被包囲的心理性」、誕生したばかりの社会主義国ソ連が資本主義国列強によつて包囲されているという脅迫感も、このロシア人の伝統的な恐怖感の延長として解されるべきである。

こうしたロシアソ連が「賞讃するものは力であり、最も軽蔑するものは弱さ」とりわけ軍事力の弱さである」と確信するに至つたとチャーチルも認めているように、帝政以来のロシア人は世界的国家としてロシアを認めさせるためには軍事力しかない。従つてどんな犠牲を払つても、軍事力は強化すべきであり、如何なる手段、方法によつても、力不足があれば、狡猾と非難されようが、大きく強く敵に優位になければならないという国家目的と国民性の下に打ち出されて来た国策ともいえる方法を用いて来たのである。

こうした国策の下に東亜に進出、侵略と併呑を企図したロシアも、日露戦争によつて挫折すると、一度は退くと見えたが、固執し、永年来の念願である太平洋暖岸港への進出企図を断念したものではなかった。より巧妙に、陰湿に狡猾にその野望を達成して来たのであつた。大正八年（一九一八年）七月二十五日の

カラハン宣言の中で、「蒙古における特権を放棄する」と明言しながら、わずか二年後の一九二二年（大正十年）シベリアのソ連軍は、白系ロシア人の追撃に名をかりて外蒙古に侵入、同年七月庫倫（今はウランバートル）に進駐、お手もりの「蒙古人民革命党」によって「蒙古人民革命政府」をつくった。そして同年八月、ソ連軍はさらにタンスウリヤンハイを占領して「土文（とわ）独立国」をつくり、ソ連式の「憲法」を公布した。これが世界最初の衛星国である。

さらに、大正十三年（一九二四年）五月三十一日の中・ソ懸案解決大綱第五条は「ソ連政府は、外蒙古が中華民国領土の一部であることを承認し、右領土内における中国の主権を尊重する」と規定し、またソ連政府は、将来両国がソ連駐留軍の外蒙古撤退について協議することに同意しながら、同年七月、突如としてその外蒙傀儡政府に指令してソビエト式の「人民代表大会」を招集させ、ソ連式「憲法」を公布し、「蒙古人民共和国」と改称させた。これによって中・ソ懸案解決大綱に定められた条項はすべてご破算となり、外蒙古はソ連にとって二番目の衛星国となったのである。

そもそもロシアソ連はその東支鉄道の布設以来、外蒙古の接收、蒙古人民共和国の併呑と軌を同じくする方策をもって、北滿を人民共和国化しようとして着々と東支鉄道沿線の在住ロシア人「赤化」から始めて、北滿一帯を「赤化」し、ひいて南滿州に及ぼし、極東赤化を実現しようと企図していた。

それが果たせる哉、東支鉄道が経済的基礎が回復するに従い、平和的占領を企図し、その「赤化の危険」は南滿州鉄道に影響を及ぼすに至ったのであった。

こうした企図の下にあるロシアソ連の謀略は日を追うに従い露骨化し、幾度か北滿、東支鉄道をめぐ

って支那との間に紛争をおこした。それは満州の侵略併呑の野望の下であり、満州をすでに第二の外蒙古化、第二のタンスウトウ（唐努烏士文化）化しようとしていたのであった。

このときソ連の魔手からも守り中国の紛争（一九一一年明治の末期清朝没落以来、内紛に明け暮れ革命は慢性長期化していた）からも隔離する王道楽土満州人の満州、中国人の中国を建設しようとした日本陸軍の構想は間違いではなかった。これが満州国の建設である。

この満州国の建設に日本が奔命しているとき、ソ連は「新疆に侵入し、その行政を操り、資源を略奪していた」。そして、昭和八年（一九三三年）四月十三日、新疆の政変を策して盛世才を督弁（行政長官）に擁立したのち、ソ連の新疆に対する軍事的侵略と政治的支配は、いっそう強化されたのである。ついで昭和九年（一九三四年）一月、馬仲英が反乱をおこし迪化（ウルムチ）を包囲したさいには、ソ連は赤軍を急派して盛世才を救援し、これがソ連の新疆軍事支配の第一歩となり、新疆は完全に南京政府から隔離された。（以上、「支那事変その秘められた史実」山岡貞二郎著による）。

満州事変後、日ソ戦の生起は必至であるかのごとく国際間に取り沙汰され、満ソ国境でのソ連軍の増強は、目を見はらせるばかりであったにもかかわらず、ソ連は正面から日本に挑戦する意図は持たず、日本からもまた対ソ戦をみずから発動することは全くなかった。

ソ連は、そのころもし日ソ戦がおれば、ドイツとポーランドが合同してソ連を攻撃することを憂慮していたのである。したがってソ連は、そのころドイツに対すると同様、日本に対しても友好的政策をうち出していた。それは、昭和七年（一九三二年）満州事変後日ソ不可侵条約の提案であり、翌昭和八年（一

九三三年）東支鐵道の売却提案であり、昭和九年（一九三四年）には滿州國の承認を米國に疎通していることであり、米ソ支日間の不可侵協定の提案である。しかしソ連の當時の提案がこれを受諾すれば友好、拒否すれば敵、と言えるほど單純なものであつたかどうかは疑問である。クレムリンの指導者達は、共產黨政權を確立したのちも數年にわたつて、自國に對抗して敷かれた布陣の力を過大視し、「狡猾な敵がたえぬかぎりわれわれの絶滅をはかつている」と見た。だから「諸外國を共產化して、われわれの救援に來させぬかぎりわれわれは死滅のほかはない」と考えた。ソ連の指導者達はユーモアもセンスも欠き、釣りあひの感覺をもたず、寛容で自他共存するという精神もなく、特に狡猾な敵のソ連にとつては、シベリアに長期にわたり駐兵した日本軍は「最惡の犯人」であつたし、共產主義政權下最大の敵國でもあつた。それは後述するであらうが、日本は鐵壁の天皇制の下に特高と憲兵、治安維持法の下に擁護されている資本主義國であつたが故に齒がたたなかつた。もともとソ連の對外政策は、外國の目をくまますことを意圖したものであり、東亞においては特に日本を目途していたのである。

それではその日本を打倒するために、ソ連が用いた戰略はどのようなものであつたか。

レーニンが昭和初年に行つた演説は注目すべきものであつた。すなわち、「現代資本主義世界には根本的にあい容れない」三つのものがある。第一は「もつとも身近な關係である日米兩國間に戰爭は準備されつつある。それが不可避であることは、うたがひの余地がない。第二は「われわれが利用しなくてはならないのは、米國とその他の資本主義諸國との間に存在する相入れない確執である。米國はいたるところで憎まれている。故に、米國はその運命をソ連にむすびつけようとするだろう」。第三は、「連合國とドイツの

あいだの間隔である」。ドイツはソ連のみが帝国主義と抗争する唯一の力であることを認めるであろう。

(吉沢清次郎氏訳「平和から戦争への道」による)

しかし重大であつたことは、レーニンの遺鉢を受け継いだスターリンが、すくなくとも日本に関してはレーニンの予言を実行に移そうとし、日本を敵とする対米接近工作を強力に押し進めてきていることであつた。すなわち、西にドイツおよびポーランドの敵意をひかえ、東に日本の脅威を感じていた当時のソ連にとつて、米国は早くから最もたのむべき相手であつた。しかし米国は、当時の世界列強中、ソ連を承認していない唯一の国であつた。

従つて満州事変以後のソ連の対米工作は巧妙かつ熾烈を極めたものであつた。

外交官、軍人等の内懷に入り込ますのはソ連のお家芸であらゆる機会、席上を駆使して行つた。

しかし、こうしたソ連の熾烈な工作にかかわらず、ルーズベルトの大統領就任までは、米国でのソ連承認は問題にはならなかつた。

昭和八年(一九三三年)三月三日フーバー政権最後の日、國務次官W・R・カッスル二世は、フーバー・スチムソンのソ連承認反対の意向を、次のように言明している。すなわち「本政府は、ロシアの支配的位置にある人々が、国際関係分野において国際友好と相容れない目的と慣習とに固執する限り、ソビエト体制との関係を結ぶことは賢明でない、との立場をとるものである」。そしてまた「諸国民間の友好的交流と通商の発展には、過去の経験が不可欠であることを明示すべき国際義務を、ソ連支配者たちが信義をもつて遂行する意図があるという確証をあたえるまでは、ロシアとの関係を樹立しても、アメリカ国民に対

する永遠の利益はなんら達成されないであろう」と述べている。(吉沢清次郎氏訳「平和から戦争への道より」)

しかるに、ルーズベルトがホワイトハウスに入るやいなや「フーバー・スチムソン・カッスルの蜘蛛の巣をはらいのけ、ソ連政府を承認しようと大童になったのである」

そのときソ連の対米債務は六億^{ドル}余にのぼっていたが、共産主義者の世界革命活動の問題をとりあげ、とくに「もし否認債務・没収財産の問題が承認前にかたづいていなかったら、以後交渉を続けても相互に満足のゆく解決をもたらす見込みはない」と強調しているのである。

ルーズベルトは自分の卓越した能力と運命とに絶大な自信を持っており、彼はそれまでソ連不承認を続けてきた三代の大統領とは毛色の異った鳥であった。彼はソ連のプロパガンダやソ連の国際情勢についての見解の理論に興味を持たなかったのと同様に、ソ連からの債権とりたてにもほとんど関心がなかったのである。したがって彼は理由があるもの、うたがわしいもの、どちらの問題についても米国の立場をすぐゆずり、モスコウのもとする承認をあたえることに同意した。

ルーズベルトにとつての関心は実に「現下の日本の膨張のみであつた」

(吉沢清次郎氏邦訳前掲書より)

もちろんソ連のルーズベルト政府への働きかけは猛烈をきわめた。そしてあることないことを捏造して、日米間の離反を策したのである。

その一端を示すものとして、駐日米大使グルーが、一九三三年三月九日付國務省宛報告した内容を摘記

してみよう。

「信頼すべきソ連情報すじより私（グルー）が得た情報を報告する」として、「現在日本は、氣違ひみたいに大規模戦争の準備をおこないつつある。弾薬航空機および自動車工場を超過勤務で働かせている。日本は、熱河や地方の支那軍からは、大した反撃をうけないと考えているので、これらの準備は明らかに対ソ戦、対米戦、又は対米ソ戦に備えるものである。」等々。

又、「ソ連シベリア本部における対日軍備は優越しており、米ソ連合による対日戦の場合を想定して各種企業を動員しているが、ソ連は工業化計画において日本におくれている、故に現在は戦争を欲しない」とか。

駐支米公使ジョンソンは、駐支ソ連大使ボゴモロフとの北京会談の模様を國務省に報告している。「ボゴモロフは、自分の意見だとして『米ソ間の友好関係の欠如が、極東におけるソ連の立場をきわめて弱いものになっている。日本政府の一派は、米ソ間に友好関係のないことを見てとり、対ソ直接戦争に賛成している。そして、そういう関係がなければ日ソ戦は日本の利益にいつそう有利に寄与するだろう、とは米国内でもひろく流布されている見解である。なぜなら、日本はソビエト・ロシアと戦っているのではなく、ソビエト体制と戦っているのだとアメリカ国民を説得する機会を日本は持つと思われるからである。』」さらに『ソ連政府は極東における自国の立場の弱さだけを十分すぎる程評価した。

それは対日戦をなんとかして避けたいからである、というのは現状下では、対日戦がおればソ連との全面戦に発展すると思われるからである。日本は満州を併合し、綏遠内蒙古をもつて蒙古国を設立し、河

北、山西、および山東の北支三省をも日本の影響下に独立させようとしている』と」

たしかに当時、日本は対ソ戦に備えて対策はすすめていたが、自ら対ソ戦を発動するつもりはもとよりなく、ことに対米戦等考えも及ばないことで、米国を刺激する小笠原要塞化のごときは企図にもなく、米国の機嫌をとることに窮々としていたのである。

この頃のソ連は、米国にとって日本は如何に危険な存在であるかを誇張して、米国を誘い出し、それによつて自国の不利を救い、さらにあわよくば自らは、圏外に去つて代りに日米戦の勃発を招きさせようと考えていたのである。

しかしルーズベルトは、なんの躊躇もなく、そういうソ連の詭計に乗り、昭和七年（一九三二年）十月十日ソ連主席ミハイル・カリニンに電報を送り、「一億二千五百万の合衆国民と、一億六千万のロシア国民とのあいだ」に關係がないという変側状態に注意を喚起し、そして諸困難に言及しながら、これらの困難は「率直にして友好的な会談によつてのみ」除去できると付言した。これは國務省を出しぬいたものであつた。なぜなら、もし國務省と論議していたら、ソ連承認はいつのことになるか分らないと思つたからであつた。

そうして、國務長官ハルはルーズベルトと合意のうえ汎アメリカ會議に出席し、カリニンは応諾のむねを回答し、十一月七日ボルシェヴィキ革命第十六回記念日に外務委員リトビノフとワシントンにおいて会談したのであつた。

リトビノフは、交渉の前に承認を欲したが、いかに米国大統領といえども、国民と政府機關を考慮しな

いわけにはゆかなかつた。ルーズベルトとリトビノフとは、債権について適当にやりとりをしたのち、一九三三年十一月十五日付文書をもつて「紳士協定」をむすび、それは「ソビエト政府は、ケレンスキー債務その他のために合衆国政府に対して七千五百万ドルより少なからざる額を、将来合衆国、あるいは、国民によって供与さるべき借款に対する普通利率を超える利率の形態において支払うこととする」以外は、すべて合衆国政府および同国民の、そしてソ連のその国民の請求権を「除去」するというものであつた。

そして翌日、大統領はリトビノフに対して、米国はソ連と外交関係を樹立し、大使を交換することに決定したと告げた。

ところが二人の紳士によつて結ばれたこの「紳士協定」なるものは、紳士協定という以上公表されてしかるべきであるのに、ふしぎにも秘密に付され、それ以後も何年間か秘密のままであつた。

ルーズベルトは、その後の閣議の席上、「二億五千万ドル取りたてられるはず」と述べたが、ソ連側は「七千五百万ドルより多からざる」意味に受けとつていた。しかもその七千五百万ドルの償還は、ソ連がそういう巨額の借款を米国から供与された場合に支払うべき三割の利子としてであつた。

これに関する論争は、以後駐ソ米大使ブリットとリトビノフとのあいだに引きつがれるが、しかしルーズベルトにとつては、そんなことはどうでもよかった。彼にとつての関心は金額よりも政治であつた。したがつて、その後米ソ間にはこれに関する借款もあたえられなければ、債務も支払われたことは全くなかつた。(以上吉沢清次郎氏前掲訳書より)

「このようにして米国の承認をかちとつた後のソ連は、スターリンはじめソ連あげて大喜びしたいとこ

ろであつたが、しかしソ連は大国である。十六年もたったのち承認してもらつたからといって喜びを表面に出すわけにはいかないのだらう。ソ連は、たんにヨーロッパの大国たるにとどまらずアジアの大国でもある。太平洋国家としての合衆国は、アジアの平和維持についてソ連と共同関係にある相手国である合衆国は、自国のうえに、また平和のためにもきわめて大きな害をもたらすことなしに、ソ連との平常関係を拒否するという従来の政策をとりつづけることはできなくなつた」といつてゐる。

当時ヨーロッパの新聞は英・独・仏・伊ともに米国のソ連承認は、不安定な根本情勢におけるあらたな因子だという見解をとつてゐる。こうして米国との外交関係を樹立したソ連は、日本につづいて国際連盟を脱退したドイツが独自の道をあゆもうとするのを慎重にながめつつ、フランス、イタリアそして英国と結び、ついに国際連盟にも加盟した。

この米国の承認を取りつづけたことは、革命主義者スターリンの天才的手腕である。

だが内にあつては、あの恐るべき大量粛清を行い、スターリン独裁への道をかためつつ、ソビエト・ナシヨナリズムを昂揚させて外アジア政策として一時的には、東支鉄道売却、満州国承認提議などという擬態をしめしながら、次の段階へ移つて行つたのであつた。こうして巧妙な対日攻勢への序曲は開かれて行つたのである。

そのころ、日本にある共産主義を信奉するものたちは、昭和三年（一九二八年）国際共産主義第四回大会において全共産党の第一任務と決定された「ソビエト同盟の擁護」を文字通り解釈し、われわれ社会主義者の祖国に対する危機に直面し、その危機に立ちむかう任務がいかに偉大であるかを知つてゐると述べ

たり、ソビエト・支那に味方するだけでなく、ソ連の平和政策を宣布し、ソ連の社会主義建設という壮大な業績をも宣伝しなければならぬと忠誠をこめて誓っているのである。

こうした教育をモスクワの共産大学で教育され、日本国内に送りこまれて日本国内の混乱と破壊に使役されていたのであったが、当時の日本の治安維持法と特高警察とをもって固められた防衛陣には齒が立たなかったため、日本の右翼に好意を持つように装い、ドイツ・ナチス党員の仮面をかぶらせ、日本の最高中枢部に入り込ませて来たのが、ゾルゲスパイ団である。

ゾルゲの国際スパイ団に関する事項の詳細は、「現代資料」(一)、(二)、(三)、(四)に明確に記載されているから省略するが、ここからゾルゲの告白を引用すると、彼は「その目的の積極的側面は、ソ連社会主義国家を擁護せんとしたことであり、消極的側面は、ソ連をして凡ゆる反ソ的な政治上の発展又は、軍事上の攻撃を回避せしめることによりソ連を防衛せんとしたことであります。私たちが共産主義の立場に立つて、ソ連社会主義国家を擁護防衛することにより世界革命に対して、間接の寄与貢献を為して来たことは既に申し上げた通りでありますが、私達が共産主義者としてソ連の指導部たるソ連共産党を支持し、コミンテルンの標榜する世界革命の綱領を支持することは、申すまでもないことであります。」と述べている。

また同じスパイ団のクラウゼンも次のよう告白している。

「諜報団の目的の究極において世界共産主義社会を実現する事にあるのですから、その目的に向つて、先ず当面の任務として、資本主義国である日本帝国における軍事・政治・外交・経済等に関する諸般の情勢を出来るだけ多く探知蒐集して、モスクワ中央部に送る事を命じられ、その目的の為に結成せられた諜

報団であります。」と。

また、大阪朝日新聞社の尾崎秀実は、東京朝日に転勤し、同社の東亜問題調査会の勤務となり、積極的にゾルゲスパイ団と協力、中心的勢力となつて活動したのであつた。

昭和十二年、昭和研究会に参加し、支那問題研究の中心メンバーとなり、近衛文麿公に接近を計り、第一次近衛内閣が成立した時は、その中枢部に入り込み、その結果いかに重大な機密が盗み取られていたか。ともあれ同年七月七日、蘆溝橋事件が発生したとき、尾崎はただちに「北支問題の新段階」という論文を書き、その冒頭「八日未明北京郊外蘆溝橋における日支両軍の衝突は、今や日支両国間の全面的な衝突を惹起せんとする形勢にある。」と述べ、ついで恐らく今日両国人の多くは、この事件のもたらすであろう重大な結果につき、深刻に考えていないであろうが、必ずやそれは世界史的意義を持つ事件として、やがて我々の眼前に展開されて来るであろうと喝破している。

そして、この一文の意味を尾崎は後年次のように説明している。（現代史資料ゾルゲ事件）

「世界情勢の近年の發展は、私の観点から一切充分に把握し得たと考えております。一切が回避し難き世界戦争への途上を急ぐものと理解せられました。欧州においてはナチスの政權獲得、ドイツの再軍備、イタリヤのエチオピア戦争、更にスペインの内乱等があり、東亜においては、満州事变後における日本の対支進出の事実が刻々展開されました。かくて私は昭和十二年七月十一日、北支事变に対する日本の強硬決意が決定された時、支那事变の拡大を早くも予想したのみならず、世界戦争へ發展することを推察し、それのみが私の立場からして世界革命へ進展すべきことすら暗示したのであります。」と。

尾崎秀実は逮捕されると、共産黨員として国際共産党を支持しソ連社会主義国家を擁護し、世界革命に寄与できたことは満足すべきことであり、日本を米国と戦わせたことは誇りとしていると豪語した。が、二年余の拘禁間に、「私は転向に非ずして、開発し、前進し、進歩したのであります。私が現在漸くにして到達し得た、死に対する平静な境地は単なる諦めの結果でもなく、また特殊な宗教的な帰依の結果でもありません、実に悠久なる君国の大義に生きる信念に到達し得たことであります」と告白し「悠久の大義とは」と三万四千五百六十字に亘って書き、「我誤てり」と述べている。彼も死の迫り来たのを知ると日本人に蘇生したのであらう。

同じころソ連の新聞は、「戦争をしかけている欧州の緊張状態を利用して極東の侵略者は、河北での略奪政策を積極化している」、とか「日本はこれを局地的な武力衝突という形で隠蔽しようとしているが、実際には、日本の帝国主義者が準備した徹底的な長期にわたる支那征服の第二幕目である」と論じていた。（芦田均氏著「第二次世界大戦外交史」より）

事實はその逆であつた。イタリアの外相チアノは、駐仏米大使フィリップスとの会談の席上、「ソビエト政府が支那をおだてて日本に対抗するよう仕向けており、ソ連の軍需品は、すでに支那に発送され、できるかぎり多くの紛争が支那におこるようソ連政府は、あきらかに意図している。」という十分な情報を持っており、また「以上のことは、二つの目的、すなわち日本の弱体化と支那本土への共産主義の拡大に役立つであらう」と語っている。

さらに同年十月二十二日、駐仏米大使ブリットがフランス社会党の指導者で人民内閣の副首相レオン・

ブルムと懇談したとき、ブルムはつぎのように語っている。「私は、最近ジュネーブでリトビンフと多くの話し合いをおこなった。彼は旧友として腹藏なく語った。すなわち日本が支那を攻撃したことは、自分とソ連にとつて喜びに堪えない。日本は、財政的にも経済的にも弱っている。かつ征服した支那を同化するには、多大の困難を持つであろうから、今後数年間極東の平和は保障された、とソ連は確信している、と。そして、さらに彼は付言した。ソ連は日本と支那との戦争ができるだけ長びき、かつ日本ができるかぎり多く支那を併合しようとするような結果になることを希望する。」と。

以上のごとく当時のソ連は、正面と裏面から日本の弱体化を策していただけではなく、フィッシャー氏が指摘しているように、「国際均衡や自他共存の精神を持っていなかった。」(フィッシャー著、吉沢清次郎氏邦訳前掲書より)クレムリン首脳部は、アジアにおいては、日支衝突をやがて日米衝突へ、欧州においては英独衝突をやがて米独衝突へと発展させ、そのいわゆる資本主義国相互の矛盾相剋を第二次世界大戦へと燃えあがらせることによって、一国社会主義の完成から、世界赤化の実現へとという展望を持っていたのである。

ロシア—ソ連は満州事変以来、あらゆる紛争において支那軍側を使喚、支援し、その共産主義勢力とソ連の野望を拡大、拡張しようと用いて来た画策は目に余るものがあつたが、特に西安事件以来は公然と又顕著にその抗日軍事行動を行うに至つたのである。

この西安事件において、極東をめぐる国際情勢は一変してきたのであつた。

即ち、一極東の一国対一国の紛争に終末を告げることの不可能な事態に発展したのである。いわゆるソ

連介入が明白になって来たからである。西安事変とは、蔣介石の命により張学良が共産軍撲滅のため、その東北軍を率いて、陝西省に赴く途中、西安において反旗を翻し、蔣介石を監禁し共産軍を国軍へ編入し、抗日救国戦を行うべきであるとの要求を容れた事件である。

とかくの諸説は紛々だったが、蔣介石は、きたるべき日本との衝突にそなえて全国民を統一するため、当時すでに延安の共産党との戦闘を中止する考えであつたことは明白で、西安事件の一年前の、昭和十年（一九三五年）、日本の侵略に対する共同行動の可能性について、ロシアの代表と相談するために、彼のもとでも親密な関係のひとりを個人的使節としてウィーンに派遣している。彼は、日本を打倒するためには、共産主義とさえも妥協し、協力を求める考えを持っていたのである。

この西安事件において、国民党と共産党の合作が成り、共産党に日本と開戦することを同意させられたのであつた。

昭和十一年（一九三六年）十一月には新任の駐ソ大使蔣廷黻は、ソ連に「日本を戦争不可避の状態に押し込めば、ソ連は中国を武力支援してくれる」保証をとりつけようと申し出た。昭和十二年（一九三七年）には、ボゴモロフおよび国民政府間の親ソ派は、「国民政府が抗日武力戦を企図する場合、ソ連の武力支援を信頼し、期待してよい」と国民政府を説得し続けているのである。

このような諸種の事前の説得工作により、蔣介石は対日戦に動き、内戦を決意するに至つた。国共軍とのその後重なる交渉も進展し、宋哲元の第二十九軍が北京特別警戒を開始し、同軍所属の蘆溝橋部隊が永定河畔の陣地を構築し、彼らが戦闘体制準備に着手し、対日挑発戦術にでたのであつた。

こうして、蘆溝橋事件は起るべくして起ったのである。

私は、日本が、日本人が未だかつて味わうことのなかった一連の大戦争に至る原因の詳細について事実の証言をすることが、亡き友への、いかなるものにも優る鎮魂譜になるものと考えているのである。すなわち、自ら疑うことなき大義、つまり祖国日本の安泰と民族の平和の礎石たることは、国民として無上の光栄であると信じ、敢然と戦い、傷つき、倒れてもなお莞爾として耐えてきた犠牲に何をもって償うべきかと焦慮しているとき、『支那事変』『大東亜戦争』という名称をも忌み、これに参加してきた者をさげすむ風潮がおこり、これを放置出来ぬところからこの真実の戦記の編纂、公刊を企図した。

わが国本来の領土をも奪われたままの状態でありながら、この重大な原因について勝者が行った誤った、前述の極東裁判の判決の考え方しか認めようとし、押しつけられた史実が横行していることを悲しむのである。

ここに真相を語り、実相を披歴して訴える真実は、あのとき、あの場で、あの潮流の中、日本がなし得た最大限、最高の対処であり、これに最大限、最高の犠牲的精神を発揮したことは、崇高なる人類の至上の行為であったことに、最も尊い自尊と自負が得られるものと考えるのである。

これを放置し、顧みようとしなければ、今後の日本は順逆の理をも確立させて行くことができなくなるであらう。

すなわち、祖国への忠誠が、逆コースとか、反動とかの名のもとに葬られてタブー視され、反逆が平和

とか愛国などと讃えられることの偏向を知り、事実を正確に把握して、これを次代の青年に、飛躍発展への糧として与えることこそ、私たちが作って来た歴史への責任であると考えるのである。そしてこのことが、歴史は道徳の規準であり、鏡であるという由縁である。

その国の歴史を知することは、その国の国柄を知ることであり、その人の履歴を知することは、その人の人柄を知ることである。

人は皆、それを省み、そこに教えられることによって初めてその国の、その人の将来を正しく見、定め得られるものである。

歴史の歪曲は、その国の混乱を招き破壊へ導いていく。その人の履歴の改ざんは、その人を破滅へ導くのと同じである。

支那事変は、大東亜戦争は、わが国開びやく以来の重大事件である。忘れようとして忘れることのできない大事件である。その中に生き、その大事件を作った者がその真相を知り、真実を語ることが歴史であり、これが道徳であり鏡である。

また、人間言うのは易いが、行うことは難い、この最たるものを戦争という。人間の極限に迫いつめられたとき体得する、無私無欲、恬淡たる道徳という鏡に映して恥じない心に至るものである。これが人の歩む道であり最高の道徳であり、鏡であつたのかと省みられるものである。

郷土の戦士が歩んだこの最高の道のその記録をここに編集しているのである。ご照覧願いたい。

以上、述べ語って来て、なおうしろめたさに髪を引かれる思いは、このような不十分な、至らない説明

では、どうして戦わなければならなかったのか、なぜ戦争をしたのか、については語りつきないことである。（『現代史外聞』にご期待願いたい）

このようなこともあったのか、そのようなことが事実であれば、といったお声を戴くことができれば、身に余るものである。

昭和二十年八月十五日。

戦後、日本人の脳裏から離れることがなかった戦争という烙印、拭うことのできない恥辱の責任転換という風潮。

日本骨抜政策に加担して、日本を根底から葬り去り、叩き潰そうとした勢力と、日本を罪惡視した極東軍事裁判観が今なお日本の中にあり、日本人を汚染しようとしている。

私たちは、その汚濁から一日も早く離脱しなければならない。

ここに、日本人の至情の発露である、真実の詩「魁」の才一刊を発行し、先人に捧げんとする由縁をしるすのである。

昭和五十九年三月十日 陸軍記念日に推敲す。

本文は「支那事変その秘められた史実」（山岡貞次郎著）より多くの部分を引用させて戴いた。

先生は海軍機関学校の卒業で、軍艦「比叡」の分隊長をされたり、ハワイ作戦を支援、海軍兵学校の教

官、海軍航空本部員を歴任され、現在日本文化大学の教授でご健在である。

私が本書の引用をお願いしたところ、一人でも多くの人に今次の戦争の真の姿を理解して戴けるなら全文でもお使い下さいと、大変なご厚意を寄せて下さいました。有難くお礼申し上げます。

その他、膨大な名著より引用、参考として利用させて戴いたのでその著書と著者名を次に掲げ、御礼申し上げます。

滞日十年

石川欣一氏著

毎日新聞社発行

太平洋戦争への道

朝日新聞社

日本憲兵正史

全国憲友会連合会編纂委員会

現代史資料7

満州事変

みすず書房

日本外交文書

外務省

日本外交史

鹿島平和研究所

田中義一伝

高倉徹氏著

原書房

原敬日記

原書房

宇垣日記

原書房

本庄日記

原書房

少年日本史

平泉澄氏著

時事通信社

加藤寛治大将伝

中共雑記

小野田都留氏邦訳

才二次大戦責任論

大鷹正次郎氏著

時事通信社

世界歴史

岩波書店

岩波書店

日本歴史

楊逸舟氏著

共栄書房

蒋介石評法

董顯光氏著

日本外政学会

蒋介石

日本外交年表並主要文書

時事通信社

平和から戦争への道

吉沢清次郎氏訳

時事通信社

蘇俄在中国

田中義一伝刊行会

芙蓉書房

田中義一伝

今村均氏著

原書房

私記一軍人六十年哀歓

大久保泰氏著

芙蓉書房

中国の赤い星

許芥昱氏著

刀江書院

中国共産党史

清水俊二氏著

早川書房

周恩来

回想のルーズヴェルト

刀江書院

連

連

刀江書院

第八章

連

早川書房

欧米の教育と日本の教育

市村眞一氏著

創文社

外交官の一生

石射猪太郎氏著

太平出版社

太平洋戦争前史

青木得三氏著

財団法人学術文献普及会

アメリカの対日参戦

福田茂夫氏訳

才二次世界大戦前史

芦田均氏著

時事通信社

太平洋戦争外交史

田村幸策氏著

鹿島平和研究所

日本外交史19日華事变下

上村伸一氏著

鹿島平和研究所

日本外交史

鹿島守之助氏著

鹿島平和研究所

日中戦争史

秦郁彦氏著

河出書房

極東国際軍事裁判速記録

寺原忠輔氏著

雄松堂書房

蘆溝橋事件

寺原忠輔氏著

読売新聞社

石原莞爾資料

角田順氏編

原書房

現代史資料

河辺虎四郎中将回想録、今村均大將回想録

西園寺公とその政局

原田熊男氏編

支那事变戦争指導史

堀場一雄氏著

原書房

現代史資料

香月清司中将回顧録

現代史資料

橋本群中将回想録

支那事変記録

田中新一氏著

近衛文麿

矢部貞二氏著

中国共産党史

波多野乾一氏著

現代史資料

柴山兼四郎中将回想録

支那事変の回想

今井武夫氏著

支那事変四周年記念座談会記事「蘆溝橋事件の回顧」

偕行社記事

第九章 支那事變の概観

(一) 蘆溝橋畔18発の銃火

——起こるべくして起こる——

支那事變は蘆溝橋畔十八発の銃声が原因で発生し、日本が経済的貧困からの脱出を企図して、満州事變を起こして満州国を建設し、北支を分離侵略しようとした日本の軍部の強硬策による無定見が拡大させたものである、という見解が戦後日本国内における一般通念となっているが、はたしてそうであつたろうか。それは余りにも皮相的な見方で、実情を知らず真相を避けて通つた極東軍事裁判的な見方である。

蒋介石が日本に学び、日本の援助をもって中国を独立させようと決起した辛亥革命以来の、建国へのひた

臨命第四〇〇號

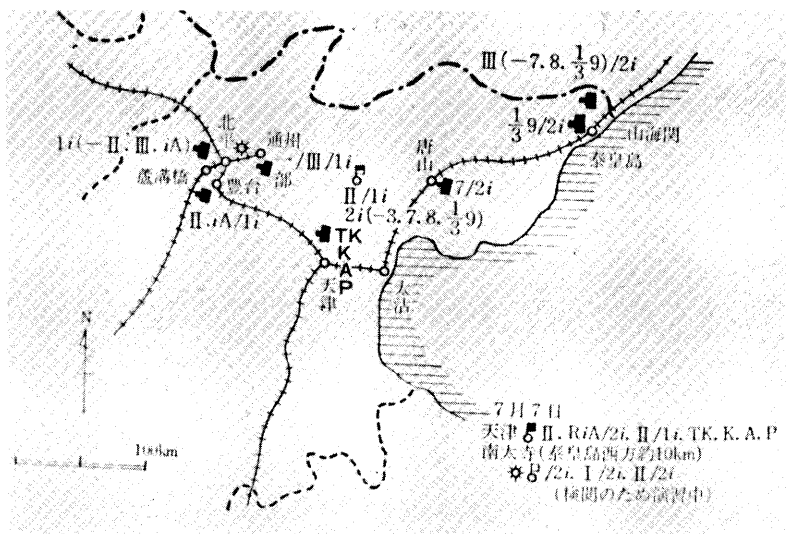
指示

事件ノ擴大ヲ防止スル爲更ニ
進ンテ兵力ヲ行使スルコト
進クヘシ

昭和十二年七月八日

參謀總長 戴仁親王

支那駐屯軍司令官 香月清司 殿



支那駐屯軍兵力配置図

むきな努力は、誠に尊敬すべきものであったが、昭和九年の五月、二年後には世界に動乱が起こり、日本は米、英、ソを相手に戦わなければならないのである、そのときこそ、中国は完全独立の宣言が出来るのだと秘かに時の到るのを待った、というのが蔣介石の真意であつて、その間に行われた各種協定、すなわち塘沽停戦協定、土肥原・泰徳純協定、梅津・何応欽協定等々は、和平のためのものでもなく、建設的な意図のもとに行われたものでもなかった。日時を遷延するための欺瞞の工作協定であつた。この蔣介石の真意を知らず、日本の内外では「和平だ」「贖懲だ」「三原則だ」と大論争していたのであつた。

あのときソ連の侵略から中国を守り、日本を守るため、満州国を独立させようとしたことは間違ひでなかった。北支翼東政権の樹立を図り、満州国の育成と内外蒙古より押し寄せてきた共産化の汚毒を防衛しようと奔走したことも正しい。

蘆溝橋畔十八発の銃火も起こるべくして起こったのであり、拡大して行つた大東亜戦争も燃えるべくして燃えて行つたのである。

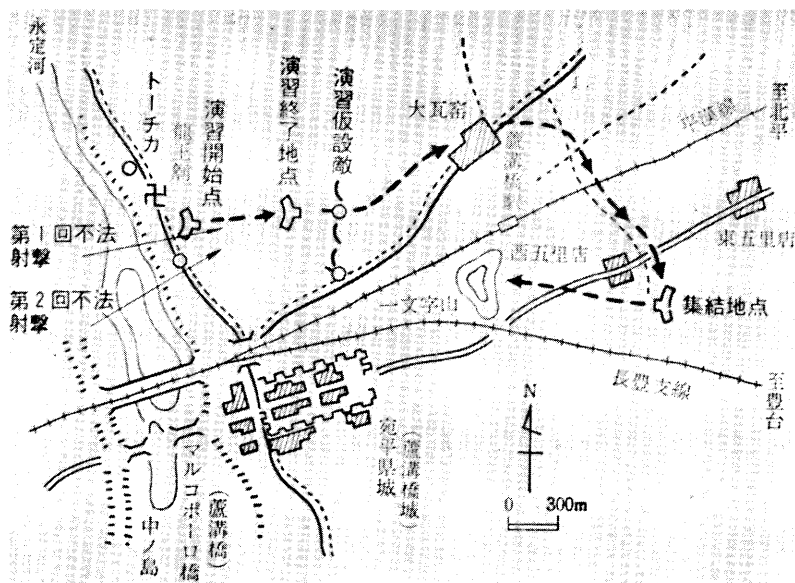
これを防止することは、日本一国では不可能である。国内を充実せよ、国軍よ、国軍本然の姿に還れ、アジアは一つなのだ、相争うべきでないと自己を犠牲にして防止しようとした人のあつたことはこのことを知っていたからで、彼らは日支の提携を熱心に求め、友好推進しようとしたのであつた。

そうであつたのに、何故この大悲劇が起つたのか。その原因はどこにあつたのか。

それは、今でも世界に二大潮流が渦巻いてゐるではないか。これを阻止することが出来るのだろうか。あのときは三大潮流であり、今より過熱した逆流であつて、その激流が、日本と中華民国をその渦の中へ落とし込んで行つたのである。これが、日支の悲劇なのであつた。この真実と真相を知ることによつて、

昭和十二年十一月三日 前夜「工兵隊」のかけた攻撃橋が敵弾で切断された。「私が修理してきます」と松平上等兵はパンツ姿になつた。





蘆溝橋付近の要図

支那事変、大東亜戦争の原因を知ることが出来るのである。

すなわち、蘆溝橋事件は米、英、ソ勢力に支えられた蒋介石の意図に基づいて、直接に第二十九軍配下の正規兵が行ったのである。そしてこの事態をこのように展開させた原動力の第一は、ソ連の多年にわたる東亜侵略への野望である。しかも、それはレーニン、スターリンとひき続いて、日本をアジアにおける当面最大の敵と見なし、このため米国と手を握り、正面において満ソ国境への圧倒的軍備をもって日本を威圧し、裏面においては、支那共産党を縦横に操作して、日・支を衝突させるといふ、巧妙極まる戦略をとったのである。その戦略や形は間接的ではあるが、ねらいはむしろ単刀直入、日本の心臓部へ指向する日本弱体化の戦略であった。これが、日本の最高中枢部に潜入していたゾルゲ、尾崎秀実等のスパイ団である。

かたや日露戦争以来、日本の進歩発展をにがしくながめていた米国が、満州事変を起こし、満州国を育成し、その充実を計っている日本の様相を傍観することに、心よからぬ思いをしていた。そこにルーズベルト大統領が登場するにおよび、年来の極東支配への野望は燃え広がって行つたのである。

それは、最終的に日本打倒を目指すもので、頑固に満州国の不承認をもつて日本を牽制し、蔣介石の抗日心理をかき起こし、ソ連を承認して蔣・ソを提携させ、一致抗日への呼び水としたのである。その基底には米・英による世界支配の構想が秘められていた。この時点においてルーズベルトが共產主義の何たるかを知っていたならば、今日の米国側の悲劇は起こっていなかつただろう。悔恨千載は致し方のないこと。このように米国の大東亜戦争への立ち上りは、昭和十六年十二月八日の日本軍の真珠湾攻撃に強制されるものではなかつたのである。F・D・ルーズベルトの胸中にあつた世界支配の構想には、日本打倒の企図が秘められていたということは、説明の要のないことである。

(二) 日本を孤立させる形に

英国はかつて支那の鉄道、電信など列国の対支投資総額の半分を占め、列国の在支銀行会社数の四〇％以上を保有し、対支貿易はつねに第一位であつた。この支那における支配的地位の回復を賭け、支那の銀政策を巧みに利用して、巧妙な手段を用いて不可能視されていた幣制法の改革を成功させたので、在支権益の確保に自信が得られたところから米英は対支政策の利害と一致させ、協力体制を作り上げたのである。それは同時に、日本を孤立させる形となつたのである。

(三) 二つの空氣が漂う

—— 慎重派と樂觀派に分裂 ——

昭和十二年七月七日夜、のどかで美しい北京郊外、蘆溝橋付近において十八発の実弾が夜間演習中の清水中隊にうち込まれた。これが、支那全土に及ぶ支那事變となり、大東亜戦争にまで発展した、というにはこの蘆溝橋事件はあまりにも些細でありすぎる。實際事件發生の翌朝、支那駐屯軍參謀長からの電報を受けとった陸軍參謀本部においては、對支處理についてはなほだしい意見の相違があつた。參謀本部第二課長（戦争指導課）河辺虎四郎大佐は當時の状況を次のように述べている。

八日の電報を見て柴山軍務課長は「やつかいなことが起こつたな」と電話をかけてきたが、武藤章第三課長は「愉快なことが起こつたね」といつており、陸軍省と參謀本部にこのような二つの空氣があつた。

ソ連に対しては警戒するが、支那は弱いことから、とこれを軽くみて談判交渉を支那駐屯軍にやらせず、断固膺懲すべきだという樂觀派の思想があり、他の一方ではこの交渉がこじれたら相当やつかいなことになるぞ、という慎重派があつた。

支那關係者は樂觀派であり、參謀本部の第一部もおおむね二つに分かれていた。陸軍省の軍事課、參謀本部の第三課及び第二部の大部分、ことに支那課はこの際やるべきだといひ、ロシア課は早く支那をたたきつけてしまわねばロシアの方がうるさくなる、今は大丈夫だが、先のことはわからないぞといつていた。慎重派は參謀本部第一部長石原少将、第二課長河辺虎四郎大佐、陸軍省軍務課長柴山兼四郎大佐のもと

だけであつた。

陸軍省軍事課長、田中新一大佐は中央省部の動きを次のように述べている。

陸軍省では、八日午前、課長会議を行つてるとき、現地からの電報を受けとり、寝耳に水ながら、結局来るべきものがついに来た、という感を抱かざるを得なかつた。事件勃発当初における軍中央部の方針は、相当混乱した状態にあつた。事態の将来についても確たる予測が立たず、南京側は全面戦を企図するか、ともとられ、またわが陸軍中央部においては、参謀本部内も陸軍省内も、おのおの思い思ひの意見により行動しつつあつて、まさに騒然たるものがあつた。

このような中にあつて参謀本部作戦課長と陸軍省軍事課長は、この事態に対処するには北支におけるわが兵力を増強し、情勢に應じて機を失せず一撃を加える。そうすることによつてのみ事態を收拾することができる、という考えに立ち、とりあえず内地から三個師団と航空一八個中隊を骨幹とするものを急派することに意見の一致をみた。また武藤課長（章）は、対支膺懲だけでなく、この機をとらえ、北支に満州国の緩衝地帯を作ろうという希望を抱いておられたと思う、と当時参謀本部第三課員であつた西村敏夫少佐は回想している。

慎重派の参謀本部作戦部長石原莞爾少将は、「目下わが国は満州国建設の完成に専念し、対ソ軍備を完成しなければならぬ。これによつて国防は確固となるのである。支那に手を出して支離滅裂にしてはならない」という考えであつたから、事件発生とともに不拡大、現地解決の方針で指導に当たつた。

当時参謀次長今井清中将が病氣のため、第一部長、石原莞爾は閑院宮参謀総長に直接この方針を説明し、

決裁を得て参謀本部の意志確定に努めたのである。

参謀本部は、事態必ずしも軽視すべきでないを見て、八日支那駐屯軍司令官あて次の指示を発した。

指示

事件の拡大を防止するため、さらに進んで兵力を行使することを避けるべし。

不拡大方針決定の考えについて石原少将は次のように回想している。

不拡大の決心をするため重大な関係をもつものは、対ソ戦の見通しであつた。すなわち、対支戦争が長期戦となり、ソ連が対日参戦するようになれば、目下の日本はこれに対する戦争準備が出来ていない。しかし責任者の中には、満州事変のように今度の事件もあつさり片付け得るという通念をもつ者があつたが、これは支那の国民性をわきまえないものである。近時殊に綏遠事件により支那側を増長させているので、事を構えれば全国戦争になると確信している。

事変が始まると間もなく、傍受電により孔祥熙が数千万円単位の武器注文をどしどしやるので、支那の抵抗決意はなみなみでないことを察知した。この際、戦争になれば行くところまで行くと判断したので、極力戦争は避けたいと思つていた。

(四) 対日武力排除を決意

—— 蒋介石 ついにソ連と提携 ——

また軍務課長であつた柴山兼四郎大佐は次のように述べている。

不拡大方針には陸軍内部にも相当の反対があり、この方針の完遂には相当の困難が予見された。

しかし、当時軍は着々軍の内容を充実し、

殊に空軍兵力の増強を企図し、北満に一二五中隊を設置する案を立て、当時の国家財政から見れば膨大な予算を見込まれる二十数億の軍事費を政府に要求する案を審議しつつあったのである。従つてこの軍の充実を待つて、すべての問題を解決するのも遅くはない。それにこうすることにより、対支問題は武力に

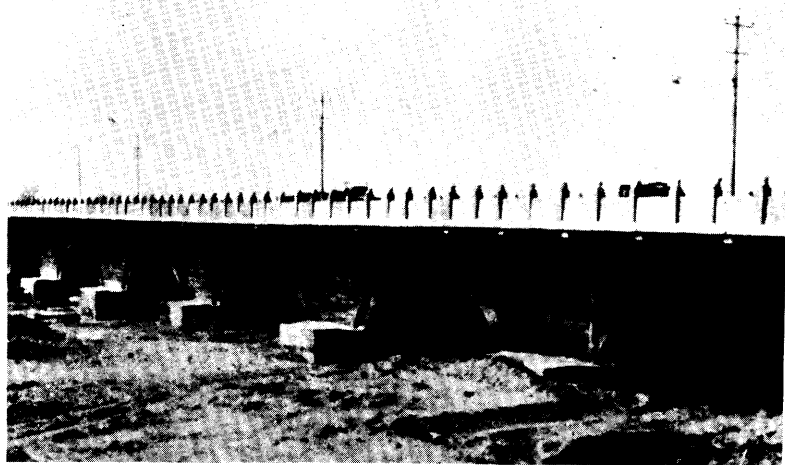
訴えることなく解決する道はなくなる。武力行使すれば今まさに途上にある満州国建設が頓挫することになり、これが将来の国力培養に影響するところ極めて大なるものがある。第三に、もし本事件を拡大するときは、蒋介石はどこまでも抵抗を続けることであろうことは想像に難くない。こうなると、まるで泥沼に足を突っ込んだと同じで、結局抜き差しならなくなるおそれがたぶんにある。この間に日本の疲弊するのを待ち受け、ソ連の対日宣戦ということも考えておかなければならない。それだけではなく事件の進展に伴い、あるいはついに英・米の対日戦参加ということにならないとも限らない。もしこのような事にな

臨命第四一八號

指示

刻下ノ情勢ニ鑑ミ支那駐屯軍
司令官ハ臨命第四〇號ヲ廢
シ所要ニ應シ武力行使ヲ爲
スコトヲ得

昭和十二年七月二十六日



蘆溝橋

今は月の名所として北京市民に知られている

つては一大事である。

以上のような理由で、なんとしてもこれを本格的な日支戦争にならないよう努力することになった。

(以上、戦争叢書戦史室著「支那事変陸軍作戦①」による)

このようにして、軍中央部においても硬緩両論両立して侃侃諤諤(かんかんがくがく)の意見が相鼎立(ていりつ)していたが、それは共に近視眼的な状態の判断であったことであり、事態ははるかに前方を睥睨しつつ進展していたのである。

そもそも米・ソの東亜侵略の野望は、ソ連があのカラハン宣言にもかかわらず、二百数十年にわたる帝政ロシアの東亜侵略の成果をそっくりそのまま踏襲しようとし、米国が日清戦争以前からの満州への垂涎を次第に具体化し、日露戦争以後の日本の発展を脅威とみはじめることによって、日本の政策と扞格し、陰悪化し、その結果が満州事変となったのである。そして支那事変の勃発

となつたのである。

この兩事変は、そういった点において轍を同じくし、あい関連し、また一般にもこの兩事変をほとんど同類のものと見る向きがある。

しかし、その結果を日本が満州国の独立によつて收拾しようとし、したがつて支那事變の發生は、日本は極力防止しなければならない性格を持つていた。

そのように努力した点において、兩事變は決定的に違つていた。しかし、ルーズベルトによる米国の極東政策が、歴代大統領の一応守つて来た枠をとびこえ、急転回して積極化し、それがソ連を承認してその東亞浸透政策を安心して活発化させ、またそれがいったん鎮靜していた蔣介石政府を、執拗な抗日策動にはしらせる原動力となつていたのである。ここに支那事變は満州事變とはつながらない、それ独特の性格があつたのである。

ともあれ、世界支配を目途する米・ソ政策の二大潮流に比べれば當時の日本と支那の政策は、まさにその二大潮流のうずまきに翻弄される木の葉のようなものであつた。しかも蔣介石は、日本が何度もさしのべた日支提携の手をふり切つて、自らその渦に翻弄される傾向を最初から持つていたように思われる。

彼は昭和二年（一九二七年）日支提携してアジアの平和に貢献することを誓約しておきながら、内心はすでに米・英に依拠して日本を排除する意向であつたことがうかがわれるのである。また、のちには塘沽停戦協定を締結し、以後親日ジェスチャーを示しながら、陰にまわつて悪辣な違反策動を行つて問題をこじらせた。同事に、米・英による対日圧迫を要請し、米・英の反応があまり芳しくないとみると、ついに

ソ連と提携して対日武力排除を決意するにいたつたのである。

蘆溝橋畔の戦火発生の直接原因は、実にここにあつた。そして、あれほど些細な発砲が、そののち燎原の火のごとく燃え広がって行つたのは、もちろんすでに国際戦略の裏面構造が早くから組みあげられていたからであつた。

日本側も冒頭に述べたように、戦の意志もなく、戦火の発生、拡大ともに、なんとか回避しようと努力した。しかし、それがずるずると深みにはまって行くのは、現地部隊同士の尖鋭化と種々な策動の他に、そのときすでにソ連の熱心な軍事支援の約束をとりつけていた蔣介石（西安事件により）としては、戦火が広がれば、まずソ連が、そしてこれまで消極的であつた米・英すらも前線に出て来てくれ、日本軍と対決してくれる、との期待があつた。事実、事変が勃発し、それが消滅せず拡大すると見たとき、軍事と外交の両面から逐次強硬に乗り出してくるのは、それまで消極的であつた米國であり、同時に日支衝突を強力に指嚇してきたソ連が、逆に突っこむ形となつて行つた。これが国際潮流の現実であつた。

第十章 支那事変

(一) 華中に拡大、全面戦争

第16師団 重要作戦に参加

動員令下るまで

八月三十一日には北支那方面軍を設け、同時に第一軍、第二軍を編成「平津地方ノ安定確保ト敵ノ戦闘意欲ヲ挫折セシメ戦局終結ノ動機ヲ獲得スル目的ヲ以テ速カニ中部河北省ノ敵ヲ撃滅スベシ」を命じた。上海方面に対しては、居留民の保護のため、上海付近から敵軍を駆逐するよう命令した。

命令に従い、第一軍は九月十一日各部隊に対し保定以北の敵を撃滅せよと命令、十四日日没後から行動を起こした。当面の敵は十七日から西方のち南方に退却を始めたので、第一線は追撃前進した。方面軍司令官は、第一軍によって保定付近の敵陣地を突破し、正定に向け進撃させるとともに、第二軍主力を滄州付近から正定向け急進させ、敵の退路をしゃ断しようとした。

一方少し前、第二軍（津浦線方面）は第一軍方面の状況に応じ、まず第十師団を馬廠付近に進出、滄県付近の敵攻撃を準備させた。次いで、第十六師団（郷土の歩兵第三十三連隊所屬）第百九師団などが戦線

に到着するとともに第十師団を津浦線に沿い南下させ、軍の主力は天津から子牙河（しあが）沿岸を西南進したのである。

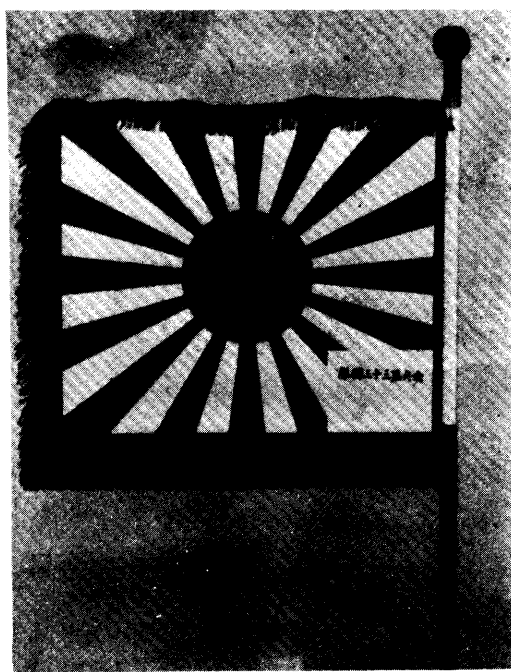
（歩兵第三十三連隊に動員令が下つたのは八月二十四日夜であつた）

七月七日に事変が突発すると、内地師団の華北派遣が当然必要になつたが、十三、四日ごろ局地解決の協定が成立しそうになつたのでいったん取りやめになつた。しかし、中国側が協定実施に誠意をみせないだけでなく、広安門事件（七月二十六日、わが一部隊が居留民保護のため、中国側の了解を得て豊台から

北京に入城しようと広安門を通過したとき、

突然中国軍は同隊の一部入城を見計らつて門を閉鎖、わが軍を門の内外に分離して射撃、身を挺して解決しようとした桜井徳太郎少佐（負傷）まで発生したため、中央統帥部は七月二十七日第五、第六、第十の三個師団に北支那派遣を発令するとともに、わが三十三連隊の属する第十六師団にも至急派遣を内命し準備させた。

当時、十六師団としては動員計画上、応急派兵という計画はもっていなかったが、演習



第33連隊が拝受した当時の連隊旗真影

地などに出てゐる部隊は駐屯地に帰らせ、準備をさせた。ときの師団長は児玉中将、参謀長平林大佐だったが、八月一日の異動で師団長は中島中将、参謀長中沢大佐となった。

ところで、その後一時は、情勢緩和のため派遣準備が取りやめられたが、事変が華中に拡大し全面戦争に突入したため、八月二十五日、六日ごろ本動員を命じられたわけである。第十六師団ははじめ華北の第二軍に属し、途中から中支派遣軍に、さらに第十一軍に属するなど、軍と師団との関係は変転を重ねた。

動員された第十六師団は九月十一日、その先頭部隊が太沽（タークー）＝華北河北省白河の河口右岸の太沽港＝に上陸以来、次のようなわが軍の重要作戦に参加した。友軍部隊名付記。

①釜陽河（フヨウガ）付近の会戦＝昭和十二年九月十九日行動開始から十月中旬寧晋付近集結まで。一〇九師団。

②上海会戦末期＝十一月十三日 白茆口上陸から同十九日常熟付近進出まで。三、一一の各師団、台湾混成旅団、九、一三、一〇一、六の各師団と国崎支隊。

③南京攻略戦＝十一月下旬の追撃から十二月十三日南京攻



練兵場における出征前の整列

略まで。一三、九、三、六、一一四、一八の各師団と国崎支隊。

④河北越定戦（カンテイセン） 同十三年一月二十六日から四月上旬まで、一四、二〇、一〇八、一〇九の各師団。

⑤徐州会戦 四月十日から六月十二日まで。五、一〇、一四、一一四の各師団。

⑥武漢攻略戦 七月四日戦闘序列発令、蘆州集結、八月中旬から十一月十一日まで。三、一三、一〇、六、九、二七、一〇一、一五、一七、一一六 郷土の歩兵第一三三連隊所属 各師団と波田支隊。

⑦襄東会戦 同十四年四月十八日から五月二十二日まで。三、一三の各師団と騎兵第四旅団。

（防衛庁戦史室の資料による）

（二） “県下で大演習へ”

—— 陸軍省が公表 天皇ご来県と喜ぶ ——

支那事変突発と三重県関係の動きに少しふれておこう。

この年には第三十五回陸軍特別大演習が十一月七日から十二日まで本県で行われる予定になっていた。十一年十二月二十四日、陸軍省から公表されて以来、県民は三軍を統監する天皇陛下の姿を見られる“千載一遇の盛儀”と喜びにわきかえり、奉迎準備を進めていたものだった。そこへ事変の突発だ。十二年九月二十日午前十時、陸軍省の発表「本年度陸軍特別大演習ハ、時局ノタメ御取り止メノ儀御裁可アラセラレタリ」——県民はがっかりした表情で聞いた。というのは、陸軍特別大演習は明治二十四年に制定されて

以来、取りやめになったのは日露戦争当時と大正十二年の関東大震災当時、それに今回と三度目。いずれも本県が予定地のときばかりであったからだ。また大演習終了後には、久居の歩兵第三十三連隊練兵場で観閲が予定されており、在郷軍人会や中学生たちは早くも緊張していたものだった。計画では参加府県は三重、京都、奈良、愛知、滋賀、岐阜、和歌山の七府県の在郷軍人会員九千人、大学、高専学生一千人、消防団員四千六百人、男子中学生、青年学校生徒、青年団員一万六千人、総勢三万六千人で分列部隊を、また奉唱部隊は女子中学生、女子青年学校生徒、処女会七千人で編成することになっていた。

話は前後するが、にわかには緊張した時局に対し、県下の関係団体は政府の方針を支持し、国策の遂行にはげむことを誓ったものである。百二十万県民は、準戦時体制の準備をよぎなくされ、また国防献金や皇軍慰問金を続々納めた。帝国在郷軍人会津支部長神野亀市大佐は率先して七月十三日、県下五万の郷軍と



中島部隊長

二万六千の軍友会員に対し「一触即発ノ危機マサニ爆発シ政府ハ重大決意ヲ表明セリ。コノ事態ニカンガミ各分会ハ率先決起、国論ノ統一強化ニ任ジ、スミヤカニ挙国一致ノ実ヲアゲ、モツテ国策ノ遂行ノ準備ニ万遺憾ナキコトヲ期シアルベシ」という「時局にかんし在郷軍人に与うる指示」を出し決意を促している（軍友会員あてもほぼ同文）。これにこたえ在郷軍も翌十四日連合分会長会議を開いて宣言、決議をし、また首相、外相、陸相、海相、関東軍、北支那派

遣軍司令官あて激励電報を打った。一方、安藤狂四郎知事も同月二十日、県公報に「諭告」を発表「滅私奉公」をさとし「：県民各位深く思イヲ今次ノ時局ノ重大ナルニイタシ、終始沈着冷静大国民ノ襟度ヲ保持スルトモニ、将来イカナル難局ニ当タルトモ不撓不屈堅忍持久ノ覚悟ヲモツテコトニ当タリ、モツテ現下ノ難局ヲ克服シ、国運永遠ノ発展ニ貢献スルトコロアランコトヲ：」と促した。

新聞もまた、戦争熱をおおるような記事を大きく掲載した。こうして国民を、県民を戦争へと引きずり込んでいった。九月には国民精神総動員運動が開始された。戦争反対を思う県民も多かったろうが、こんな情勢下ではとても主張できなかった。そんな記録も残っていないようだ。

出征当時の師団編成は別表のとおりである。

軍と師団の関係は、その時々で作戦目的などによって「戦闘序列」というもので、その編組を合わせられる慣習で固定的ではない。師団の数は一一五、六個と独立した歩兵部隊（旅団や連隊）戦車、砲、工兵部隊や兵たん（後方関係部隊）などの組

第16師団編成表（昭和12年秋・数字は人数）

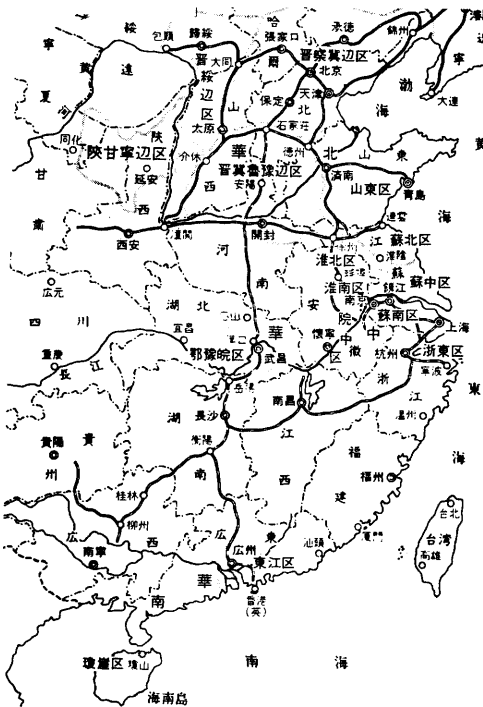
第十六師団総兵力（二五、〇〇〇）		師団司令部（三三〇）	
師団長 中島今朝吾中将		参謀長 中沢 三夫大佐	
歩兵第十九旅団旅団長 草場 辰巳少将		歩兵第九連隊連隊長 片桐 護郎大佐	
歩兵第二十連隊連隊長大野 宣明大佐		歩兵第三十旅団（七、五六〇）	
旅団長 佐々木到一少将		歩兵第三十三連隊（三、七四七）	
連隊長 野田 謙吾大佐		歩兵第三十八連隊	
連隊長 助川 静二大佐		騎兵第二十連隊（四五〇）	
連隊長 笠井 敏松中佐		野砲兵第二十二連隊（二、九〇〇）	
連隊長 三国 直福大佐		工兵第十六連隊（六七〇）	
連隊長 今中 武義大佐		輜重兵第十六連隊（三、四六〇）	
連隊長 柄沢 畔夫中佐		第十六師団通信隊（二五〇）	
第十六師団衛生隊（一、一〇〇）		第十六師団第一（第四野戦病院）（七〇〇）	
第十六師団兵器勤務隊			

み合わせであり、師団の編成は固定している。この編成表は防衛研修所戦史編さん官高橋正男氏（元陸軍大佐、三十三連隊出身）に作成を願ったもの。

①工兵隊、輜重隊は「大隊」と呼ばれていたかも知れない②歩兵連（大）隊の大小行李（こうり）は本部の中を含む③カッコ内の数字は編成上の人員。

歩兵第三十三連隊

【連隊】本部（二二四）三個大隊（各二、〇九二）と歩兵砲中隊（二六一）速射砲中隊（八九）▽大隊
 ▮本部（一二〇）四個中隊（各一九四）
 と機関銃中隊（二三九）歩兵砲小隊（五六）▽中隊▮三個小隊▽小隊▮六個分
 隊▽機関銃中隊▮四個小隊（各二個分
 隊）彈藥小隊（二個分隊）▽歩兵砲小
 隊▮（二個分隊）彈藥分隊▽歩兵砲中
 隊（二個小隊、小隊は各二個分隊）彈
 藥小隊（五個分隊）▽速射砲中隊（二
 個小隊、各二個分隊）と彈藥小隊（二
 個分隊）



支那事变発動時の中支要図
 (昭和12年)



第30旅団長
佐々木到一少将

(三) 静かな営内ざわつく

——動員下令に兵士ら興奮——

動員令下る

宵からむし暑かった。それでも十時を回ると、ざわめいていた久居の町も、ようやく寝静まりかけていた。歩兵三十三連隊の兵営も、消灯ラッパとともにひっそり暗くなったばかりだった。突然、営内に「週番士官集まれ」のラッパが鳴り渡った。その夜、週番士官に当たっていた第三大隊歩兵小隊長、野呂征久さん「鈴鹿市江島町」は（あるいは）と予期しながら、本部前につけた。「ただいま師団司令部（京都は十六師団）から動員下令の電話があった。外居住者を直ちに呼集せよ」週番司令、幡野清大尉（漢口作

戦・大別山の戦いで旅団副官として活躍中戦死）が緊張したおももちで命令した。暗く静まっていた営内に一斉にあかかと灯がともり、兵士たちは興奮した顔をあげた。昭和十二年八月二十四日の夜のことである。

野呂小隊長は、歩兵砲隊にとんで帰り、すぐに準備してある登営状を当番兵に渡し、営外居住者の下士官以下を集め、動員令下命を伝えるとともに「別命があるまで静かに休むように」と指示した。戦事命課はとくに決まってい

た。待つ間もなく、砲隊長はじめ営外居住者が次々登營してきた。連隊長野田謙吾大佐（故人）は、連隊の全將校を將校集会所に集め、改めて動員下令を伝え、平時義務を打ち切り戦時編成に着手せよと命令した。夜半解散して床に着いたが、思ひは中国大陸にはせていた。兵士たちも同じだった。みんなウズウズしていた時代だから、動員下令を聞いて「おめでとう」を盛んに交わし合っていたが、やはり興奮に眠られないのか、ごそごそ寝返りが絶えなかった。

第三機関銃中隊彈藥小隊長だった山岸実三さん（津市八町）は、その日は午後休暇で、婚約中だったいまの奥さんと津海岸でデートしていた。「この間、独立第十機関銃隊が動員されているから、僕らの出陣も近いだろう」「……」「まあ、この戦争も四年ぐらいで終わるよ。なあに、日本の大勝利さ。心配しないでいいよ。僕はきつと元気で凱旋する」

こんな話を交わして別れてきた。夜遅く、久居に帰って驚いた。着剣して、弾を持った兵や伝令、営外居留者がものものしく、あわただしく動き回っているのだ。その夜、考えあぐねたが、結局婚約破棄を伝えた。だが、「君の出征は覚悟のうえだよ」奥さんの父親が一升ビンを引っ下げて下宿にとんできて、とうとう三三九度とも水

臨命第五百八十四號

指 示

臨命第五百三十三號・基々左ノ如ク指示ス

一 北支那方面軍司令官ハ威ルヘク其兵力ヲ集結シ軍隊ノ整備及戦力ノ恢復ニ努ムヘシ

二 北支那方面軍司令官ハ臨命第五百三十九號・基々兵力ノ外他方面ヘ轉用シ額應シ更ニ一師團ヲ平津地方ニ集結スヘシ

昭和十二年十月二十五日

參謀總長 載仁親王

北支那方面軍司令官伯爵寺内壽一殿

サカズキともつかぬようなサカズキを押しつけられたものだった。

久居公園（城跡）で夜間射撃演習の設営中に動員令を受けた田中浅次郎さん「志摩郡阿児町鶴方」は「いよいよ行けるかと満州駐在当時と同じような、のんびりした気分でしたよ」。また津市雲出島貫町倉田明さん（故人）のように長男を奥さんの腹に残し、あるいは津市栗真中山町丸山正一さん、伊勢市奥田一隆さんのようにたったふたりの兄弟が同じ日に召集令状を受けるなど―青壮年に続々「赤紙」が下った。

翌二十五日から動員業務が始まった。

二十五日 晴れ。午前十時第一動員下令。表門歩哨に着く。

二十六日 晴れ。兵器、被服受領す。

二十八日 晴れ。戦闘服第一種軍装分配さる。午後二時より軍装検査（練兵場軍装検査場で）連隊長、旅団長閣下の訓示を受く。

二十九日 晴れ。午前十時から基本体操、銃剣の刺突訓練実施さる。同十一時から営庭で面会許可さる。父母や弟らくる。（久居市野口町、松田雅胤さんの日記から）

将校は指揮刀に変わつて軍刀をつけ、兵は兵器はもちろん軍服から下着まですっかり新しいものを支給された。いうまでもなく野戦装備である。早くも赤紙を持った召集兵が続々営門をはいつてくる。徴発馬も次々到着する。

三十日 晴れ。午前二時起床。神仏二詣デ、シバシオ別レシテ壮途ニ、勇躍家ヲ出タノハ三時半。五時、村ノハズレニテ村民ノ人々ト別レシテ徒歩ニテ連隊ニ向カウ。午前七時真ッ先ニ入隊、身体検査合格、

第二機関銃隊二編入サル。(久居市森町、西田優さん〓故人〓の日記から)

(四) 兵隊ら堂々の出征

——沿道は人、旗でうずまる——

出征

戦時編成となると、平時は一大隊三個中隊の編成が四個中隊になる。もちろん中隊編成人員も百五、六十人から二百人にふえる。

召集された補充員、すでに一期検閲をすませた初年兵も加えて編成替えが行われた。第三大隊砲小隊長の野呂征久さん〓鈴鹿市江島町〓は「この年の初年兵は、ちょうど私が大隊砲教育を終わつたばかりののやまた召集入隊するもの等、ほとんど彼らの現役当時を知っており、お互いに親しみ深かった。そのうえ小隊二門の大隊砲は県民から献納された「愛国号」第一号、第二号であり「愛国大隊砲小隊」と自負し、チーム・ワーク、士気ともに盛んでした」という。こんな隊もあつたわけである。

軍装検査の直前、微発馬がなれない車をつけられてあばれ出し、数人の兵隊がケガをするという事故があつた以外は、動員準備は順調に進んだ。

三十日 晴れ。中隊本動員戦時要員を完全に充足す(百九十四人)午前十一時より体操。午後四時面会許さる。父母、弟らくる。私物品を返還す。

三十一日 晴れ。午前六時より銃剣術。認識票をいただく。



第33連隊長 野田謙吾大佐

九月一日 晴れ。午前八時より種痘（しゅとう）同九時より基本体操。午後四時から面会許さる。

二日 晴れ。午後四時から六時まで面会許さる。軍装検査の準備。

三日 晴れ。午前七時から中隊軍装検査。大橋（毅郎）中隊長殿の断固たる決心を約一時間聞く。午後二時より連隊の軍装検査実施さる。午後四時から六時まで面会許さる。藤ダナの下で父母としみじみと会う。思い出の藤ダナとなるだろう（久居市野口町、松田雅胤さんの日記から）

また、一等兵だった広千吉さん
『伊勢市二俣町』は「私は宮庭の
垣の内と外で母と会い、百円の小
使いをもらったものでした。翌三
日夜、見送りの受けず出発したが
大阪では歓迎されました。母から
もらった百円で芸者をあげまし
た」

九年の満洲派遣のころまでは、
出征に際しては連隊全員で神宮に
参拝したものだだったが、今回は二
日の日に野田連隊長以下将校、下

士官、兵の代表だけが参拜、武運長久を祈った。

こうして三日には動員を完結したのであった。

四日 いよいよ出発だ。日本晴れ。午前零時起床、中隊舎内外の掃除。同零時三十分出発のため整列。同二時屯営出発（連隊営門から阿漕駅まで約四^キの沿道は、将兵の肉親や知人はもちろん、地元民や学童、在郷軍人会、愛国婦人会の旗の波でうずまっていた）

「バンザイ」「しっかりやれよ」

歌の文句どおり、歓呼の声に送られて、いまぞ、いで立つ父母の国——熱狂的歓送風景だった。阿漕駅休憩場に集合。県知事のあいさつあり。父母らと別れを惜しむ。同五時阿漕駅から軍用列車出発。同十一時浪花駅に到着し、休憩後宿舎に向かい前進す。南区の伊藤旅館。夜十二時ごろ父、松阪よりくる。

五日 晴れ。於、伊藤旅館。

六日 晴れ。午前八時三十分ごろ稲田屋旅館前に集合、大阪港にいたる。午後三時四十分「北辰丸」に乗



堂々の征途出陣

船開始、同四時十分完了。尽きぬ別れを大阪港に残して父に生き別れ、同五時出帆（将兵の乗った四隻の輸送船は海軍に護衛され瀬戸内海から玄海灘、黄海を抜け、九日には渤海（ぼっかい）にはいり、十一日朝、太沽（タークー）沖に到着した。この間、船中で二回目の赤痢予防接種を受けるなど、万全の上陸準備を整えた（久居市野口町、松田雅胤さんの日記から引用）

また、補充隊第三大隊長（少佐）で、本隊の出陣を見送った喜早俊次郎さん『伊勢市浦口町』は「このころは堂々とした出征風景だった。どの顔も生き生きと『勝たずば生きて帰らじ』の気概に満ちあふれていた。これが、戦争末期になると兵もみすばらしく、また機密上夜中にこそそこそと出て行ったものですが」と回想している（喜早さんは同十四年八月、独立混成第六旅団通信隊長で華北へ出たこともあるが、津連隊区司令部で終戦。中佐）

もう一度、松田雅胤さんの日記を引用しよう。

十二日 晴れ。午前十時、軍糧城（ぐんらんじょう）に向かう。約五里、炎熱と水不足のため落伍す。村落に露営。言葉全く通じずシナ特有の悪臭にヘドをもよおす。

連隊が上陸した十一日、東京では「国民精神総動員大演説会」が日比谷公堂で開かれ、台風をおかしてつめかけた聴衆に「時局に処する国民の覚悟」と題して近衛首相が「挙国一致」をぶっている。一方、蔣介石夫人宋美齡がNBC放送で「日本軍が婦女子を虐殺している」とアメリカ国民に訴えている。

(五) 不意に十字砲火

——死傷者続出、白兵で撃退——

東辛荘の戦い

九月上旬、方面軍司令官寺内寿一大将指揮のもと、第一軍は津浦線（しんぽせん）、第二軍は京漢線（けいかんせん）に沿って戦果を拡大しつつあった。既述のとおり、師団（十六師団）の先頭部隊として十一日太沽に上陸、同地で一泊した三十三連隊は、翌十二日早朝、第二大隊として水路出發させたのち連隊主力（本部と第一大隊）は天津向け行軍を開始した。同夜は、途中の軍糧城で泊まり、十三日同地から大発艇（大型発動機艇）に分乗、同日夜半天津に着いた。当時、天津市街はすでに日本軍の砲爆撃で廃虚となり、住民は避難してほとんどいなかった。第十六師団は、第二軍に編入されて西尾中将の指揮下にはいり天津に集結、直ちに軍の左翼に増加を命じられた。連隊主力は十四日、濁流鎮に向かった。炎天下、落伍者も出る強行軍だった（松田雅胤さんの日記引用）

同地で露營した主力は、翌十五日午前十時、姚馬渡（ちようまと）付近に先遣した二大隊を追及するため出發。津浦線と京漢線の間を流れる子牙河（しあが）を大発艇でさかのぼった。午後四時ごろ、東辛荘付近に差しかったとき、不意に左岸堤防（軍隊用語では下流に向いて左）から十字火を浴びせられた。艇列は混乱、たちまち旗手はじめ工兵の戦死傷が続出した。軍旗、連隊長以下本部と第一小隊（山田昇少尉）だけが敵火線を横切ってやや上流の右岸に上陸、軍旗を守った。主力はチェコ機銃と手投げ弾（手り



塘沽を出発、天津に向かう

ゆう弾）の猛火を冒して敵前に強行着岸、楊柳茂る堤防をかけたが、直ちに攻撃を開始した。不意の遭遇戦だけに敵兵力は不詳、しかもあたりはひびきを没する泥沼（水壕）で戦闘は困難、次々と死傷者が出た。第二中隊（佐々木巖大尉）も右岸に上陸し、軍旗のもとにかけつけたが、間もなく独立任務隊として東辛荘敵陣の右翼を攻撃した。第三中隊（杉本保二大尉）は、小行李の援護隊として後方を追及中だった。夜にはいっても敵砲火はおとろえず、しかも七回にわたって逆襲してきた。河岸に陣取った主力は、大隊長渡辺綱彦少佐の直接指揮のもと、夜どおしこの敵を迎え撃ち、白兵で撃退した。

一方、南透荘を十三日に経て姚馬渡にあった先遣隊の第二大隊（三浦俊雄少佐）は十五日午前八時半、中井支隊（歩六十三）の南趙扶鎮攻撃に協力するため同地を出発した。【三十三連隊は松江の六十三連隊（第十師団）と第一線を交代する予定だった。六十三連隊長が、当面の敵を払脱攻撃する準備ができてから新参はひとまず

下っておれ」といったので、同攻撃戦線を交代することにし、ひとまず下って露営した。わが連隊主力を不意打ちした敵は、十師団の猛攻で退却、東辛莊付近に回った敵であったとも伝えられている。午後五時ごろになって連隊主力の苦闘を聞き（それ以前に銃声を聞き察知）直ちに第七中隊（鹿兒島正幸大尉）に機関銃一小隊、大隊砲小队を付け姚馬渡に急行させ、同地にあった第八中隊（田沢博大尉）とともに連隊長直轄で戦闘に加わった大隊主力は同六時、中趙扶に陣地を確保し夜を徹した。敵は三回逆襲してきたが撃退、わが方は戦死一、負傷七を出した。

再び主力方面の戦闘に戻る。地形敵情ともにはつきりつかめなかったが、子牙河岸に陣取り、十六日払暁、砲の援護のもと突撃を敢行した。だが敵はすでに浮き足立っており、太陽の昇るころには死体二百十七を残し、西方に退却して行った。この戦闘で連隊は第一中隊長、大橋毅郎大尉下十一人の戦死、三十八人の負傷者を出した。敵に撃ち込んだ小銃実包一万五千九十九発、機関銃弾六千八百六十発という数字は、不意打ち、緒戦のろうばいというより、手ごわい戦闘であったことを物語っている。

午前十一時半ごろには、一日遅れて天津を出発した第三大隊（上田孝少佐）も主力の苦戦を知ってかけつけ、ともに戦場掃除に当たった。歓呼の聲に送られ、故国をたつてからわずか十日、早くも「護国の鬼」となった戦死者は、戦友の手によっていねいに子牙河畔でダビに付された。この日、第五中隊（脇岡直大尉）「機関銃一小隊配属」は、中井支隊長の要請で六十三連隊第三大隊の右翼に、大隊砲を中趙扶西端に増加され南趙扶鎮に痛棒を加えた。

さて、同地に露営した主力は翌十七日、南趙扶鎮にはいり、先遣の第二大隊と合流、上陸以来初めて連



軍服姿の山田昇さん

東辛荘の戦い

(六) 三隻だけが脱出

——なお敵弾激しく迫る——

隊の全兵力で集結した。二大隊長だった三浦さんは「一大隊が先遣隊となるはずだったが、二大隊が早く準備ができたので出発したのでした」と語っていた。

また第七中隊の小隊長だった川戸正巳さん（故人）は「天津を出るときチョココレートを背のういつばい買い込んでいたが、背のうを置いて主力の救援に出ている間にそっくり、シナ兵に盗（や）られましたよ」これはエピソード。

第二中隊第一小隊長（少尉）だった山田昇さん（上野市猪田）が語る連隊将兵にもあまり知られていない戦闘秘話

。第一中隊（大橋毅郎大尉、員弁郡出身）は、軍旗護衛が任務だった。前項で述べたように連隊主力の分乗した大発艇は、エンジンの音を響かせながら子牙河（しあが）をさかのぼって行く。川幅は上流約百メートルだが、水の流れている所は約三、四十メートル。水は濁っており流れはかなり早い。一

番艇には連隊長、副官、旗手（軍旗）通信隊長、それに本部要員約十人と重要書類が乗り、約二十分あとに続く二、三番艇には第一中隊の山田小隊が分乗、以下二、三小隊、通信隊、大隊主力の艇が追う。両岸にはヤナギが茂り、戦場とは思えない静けさ。実際將兵たちは第二大隊が先行しているし、その付近にはまったく敵はいないものと安心していった。それにいい陽気だ。上陸らしいの行軍の疲れがどつと出て、うつらうつらし始める者もいた。山田少尉もナシをかじりながら、はやしたての鼻ヒゲをいじっていた。幹部候補生出身の二十二歳という若さをカムフラージュし、部下を掌握するため出征当時からヒゲを置いていた。部下も、山田少尉は三十歳近いだろうとみていたものだ。これこれ午後四時ごろだろうか。

ピューンツ

突然、左岸からタマが飛んできた。大発艇のカジを握っている工兵が「このぶんだときまつせ」——じつと堤防をにらみながら注意する。

「そんなことあるもんか。このあたりにや、敵はいないはずだぜ」



子牙河畔の前進

「敗残兵だろう」

兵士たちはみんな二十歳前後、野戦経験がないだけに平気なものだが、さすが工兵は歴戦の兵士だった。
「注意した方が身のためですぜ…」

いい終わらぬうちだ。左岸堤防が一斉に火を吐いた。迫撃砲、チェコ機銃、小銃による激しい集中射撃を浴びせてきた。まったく不意打ちだった。大発艇の防弾タテ（盾）の鉄板をあげる間もない。

「軽機ツ」

山田少尉はどなった。辻本芳二射手が勇敢に射撃を始めたが、たちまち、

「やられたッ」「伏せろッ」

山田少尉は絶叫した。

バシッ

敵弾は装甲大発艇の船腹を貫き木内原太上等兵が背中を射抜かれ戦死。続いて浅川米蔵上等兵が太ももを、小林淳二上等兵も腹をやられた（戦死）

山田少尉が頭をあげて視線を回すと、一番艇が混乱している。（旗手の三木少尉がやられた）後続の艇が炎上を始めた。（通信班の乗っていた艇で、手投げ弾が当たって重油に引火、連隊本部付き曹長、久居市二の町、小林清吾さんⅡ右手首盲管Ⅱら工兵三人を含む二十数人の死傷者を出し、カジを失った）どの艇も混乱、中隊長の命も聞けない。このとき「強行突破せよ」との連隊長命が飛んできた。「続けっ」山田少尉の怒号。工兵は巧みに敵弾をぬってカジを操った。

工兵を失った一番艇は、代わって通信隊長、田中嘉衛中尉がカジを握っていた。やがて敵火線を脱し、右岸（敵の対岸）に艇を着けた。振り返ると後続の艇はない。（注、下流に上陸した）結局、ここまで脱出したのは本部と山田小隊の計三隻だけだった。

「上陸ッ」山田少尉はどなった。だが、なかなかみんなあがつてこない。前記三人が戦死、十五人が重傷を負ったのだ。火線の中心を脱出したものの、敵弾は激しく、しつこく追ってくる。部下を思う山田少尉は、弾雨について戦死傷者を堤防の裏側に收容、そして応戦を開始した。

兵士たちがあわてふためいているとき、艇を降りた野田連隊長は、ピュン、ピュン飛んでくる敵弾の中を、まるで敵を無視したようにのしのと堤防に上がり、ヤナギの木の下にどっかり腰を降ろして双眼鏡を取り出し、「ふむ、ふむ」と敵陣を偵察した。大島連隊副官も平気なもの。百^〆はあろう巨体で、よいしよ、よいしよと連隊長に続く。田中中尉も敵襲なんてどこ吹く風の表情。これを見た山田少尉は、「ふむ。さすがえらい人は大した度胸だわい」と感心した。

やがてあたりが暗くなってきた。だが、敵火線はいつこうに下火にならない。

（七） 軍旗は田中中尉へ

——護衛をつけ民家に安置——

東辛莊の戦い

戦闘は夜にはいった。敵火線は活発だ。「山田少尉いるか」野田連隊長の呼ぶ声。

「はい」とかけ寄ると、

「兵隊は山田少尉の小隊だけだな」

「はい」

「おれが指揮をとるッ」

「はッ」

「旗手がやられた。山田少尉が軍旗を持て」

「はッ……。部下の損害が大きいので、心配です」

「そうか。それもあるね」

語調をやわらげた連隊長、



故 木内原太さん

「それでは田中中尉が軍旗を持て。山田少尉は直ちに負傷者を収容せよ」

こうして軍旗は田中嘉衛中尉が持つことになり、山田小隊の半個小隊（小銃二個分隊、軽機一丁、てき弾筒分隊の計四、五十人）を護衛につけ、連隊長とともに約四、五百メートル離れた民家に安置した。

さて、山田昇少尉は残る二個分隊を堤防に散開させ、応戦を続けた。この夜、敵は三回にわたって夜襲してきたが、

上岡八郎第一分隊長（のち奥福集で戦死）以下兵士たちは必死に防戦、軍旗を守った。

山田少尉は一線と軍旗を安置した民家を往復して指揮を続けた。民家では、軍旗と重要書類を真ん中に、まわりに大発艇から引きあげた石油カンを積んで、（もしも）の用意ができていた。連隊長は、敵に夜襲され、いよいよ最後のときには油に火を放ち、軍旗を焼く決心だった。『ふさ』だけとなった有名な三十三連隊軍旗は、早くも緒戦で最大の危機にさらされたのであった。これは連隊の将兵にもほとんど知られていない秘話である。

がん強な敵も、夜明けとともに退却していった。木内、浅川、小林のかわいい部下三上等兵を死なせた山田昇少尉は責任を感じた。刃渡り二尺三寸の軍刀を遺体の前に立てた。ツバ下三十センチには「南無妙法蓮華經」と刻んであった。山田少尉は日蓮宗だった。「ナムミョウホウレンゲキョウ」……続経してめい福を祈り、「アダはきつとうってやるからな」と誓った。さて、この戦鬪で下流に上陸した大橋中隊長も戦死、田中通信隊長が新しく中隊長に任命された。

山田さんは、「北支の戦鬪で、戦争はやめておけばよかったのです。いまさら言っても仕方ありませんが」と語っていた。



人皇庄付近の追撃

このあと無錫の戦闘で右足切断という重傷を負うが、そのときの様子は「無錫の戦闘」の項で紹介する。
勲五等旭日章。弟の勇さんも同じ連隊の第十一中隊に属して出征したが、のち航空隊に移り、昭和十七年三月三日殉職している。

東辛荘の戦闘で右手首に盲管銃創を受けた連隊本部付き曹長、小林清吾さんⅡ久居市二の町Ⅱは、次のように回想している。

「私たちの艇には、通信班と本部書記ら約四十人が乗っていた。工兵が三人ともやられ、カジを失ってふらふら。手投げ弾が当たって重油に引火、艇内が火の海となった。命令があるまで次の行動に移れないわけだが、やむなく水の中に飛び込み、中州にたどり着いた。幸い大豆が植えてあり、この中に伏せて応戦、日没にはいつて堤防にありました」



㊤ 小林淳二さん
㊦ 浅川米蔵さん

第一中隊の小隊長だった宮本米吉さんⅡ津市西阿漕岩田Ⅱは、次のように記憶している。

「戦場処理の際『百五十三団』

と記入された敵軍旗が見つかったところから、敵兵力は約一個連隊と推定された。上陸までは、日の丸を見たら逃げ出すだろう、と甘く見ていたのは大間違いで、敵の闘志は盛んだった。また、敵歩兵の装備は日本軍より優秀だった。日本軍は一発必殺主義で、手リユウ弾は一人一発だけしか渡されておらず、しかもそれがシュロの木の弾尾がつき、地面に当たったショックで爆発する着発式信管の旧式なもの。おそろく日露戦争当時の残りものだろう。湿地帯のことで、十発のうち八発までが不発だった。これに比べ、敵兵は腰の回りに七、八発もぶら下げ、次々と投げ込んでくるので痛めつけられました」

(八)

見えぬ敵に応戦開始

森川伍長ら突撃、敵退却



大橋毅郎さん

東辛荘の戦い

この戦いで活躍した森川孝さんⅡ三重郡楠町Ⅱの思い出話。当時第一中隊第二小隊の分隊長（伍長）だった。

まったく不意の襲撃だった。両岸からはさみうちに集中射撃されたかと思った。たちまち工兵が戦死、カジを失った大発艇はふらふら。何しろ敵の姿が見えないだけにただ夢中だった。連隊本部もやられたらしく軍旗の竿頭、金の玉が流れてきた。勇敢な兵が飛び込み、かろうじて拾いあ

げた。やつとのこと大発艇を左岸、つまり敵側へ着けた。堤防斜面をよじ登り楊柳のかげに散開、応戦を開始した。見えぬ敵に向かつてである。敵の砲火はますます激しい。双眼鏡をのぞいた大橋毅郎中隊長は、たちまち胸を撃ち抜かれ（と記憶する）即死した。詳しくはあとでわかったことだが、敵は堤防を二、三百人にわたってくり抜き、コンクリートを打った陣地を構え、さらに堤防から約五百坪の地点、東辛莊部落に本陣地を設けていた。要所に機銃を配置、各陣中とは交通ごうで結んでいた。かろうじて堤防にたどりついたばかりの中隊にはもとより、そんな敵情がわかるはずがなかった。それに折からの西日をまともに受け、まぶしくて前方がよく見通せない。

わが軍の上陸を見た敵はいったん部落に退却、迫撃砲を集中してきた。このころになつて機関銃も到着したが、森川分隊はすでに二人を失っていた。頼みのテキ弾筒分隊（第三小隊）も、岡村範二（桑名郡）伊藤正教（四日市市）両二等兵がたちまち戦死、間もなく分隊長の乾上等

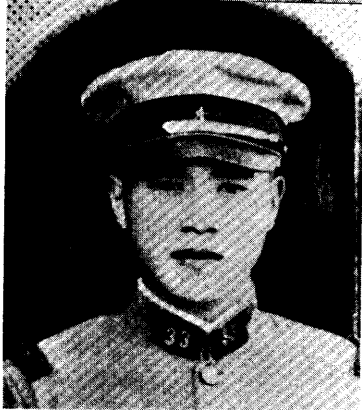


進撃する日本軍

兵も戦死してしまった。

クギづけのまま、日はとつぷり暮れてしまった。だが敵火線はいつこうにおとろえない。そしてくり返し夜襲に出てきた。

森川伍長は、まったくいきりたっていた。敵弾などこわいとも思わなかった。堤防の川べり沿いに前進して突撃を企図した。こうして夜明け方、敵は退却して行つた。このときになって、渡辺修小隊長から「森川、お前やられているぞ」といわれた。「えっ？」はじめて気がついた。左腕に四カ所も弾片を受け、血が服を通していた。突撃した際、逃げ遅れた敵が放り投げて行つた手リユウ弾にやられたものらしかった。森川伍長は「このまま戦闘を続ける」と頑張つたが、渡辺小隊長に「ガスエソにでもなつたらどうするか」と諭され、天津の第一兵站病院に下つた。十日ほどで回復、石家荘で本隊に追いついたのだつた。戦線に



④ 故 岡村範二さん
⑤ 故 伊藤正教さん

復帰して間もなく、十一月末の無錫の戦闘で負傷した。薄暮、トーチカを攻撃中、手リユウ弾の安全ピンを抜いた瞬間に左腕

に貫通。盲管銃創を負い、内地に送還された。病院生活四カ月後、京都の師団無線電信教習所で教育を受け、津連隊区司令部に変わった。その後士官学校を出て満州第六国境守備隊の教官、終戦時は独立混成第百三十五旅団（満州）の高級副官、二年半の抑留生活を経て復員した。

エピソードをひとつ。

久居市七栗出身の飯田信夫軍曹（大東亜戦争で戦死）が、「やられたッ」と絶叫。かけよった戦友がよく調べてみると、水筒のつりカワがぷつぷつ切れているだけ。本人はベソをかいたものだが、それ以来ツキに恵まれ、ガイ旋までまったくの無傷だった。（小隊長だった久居市新町、横山孝三さんの話）

（九） 軍旗、兵隊の血吸う

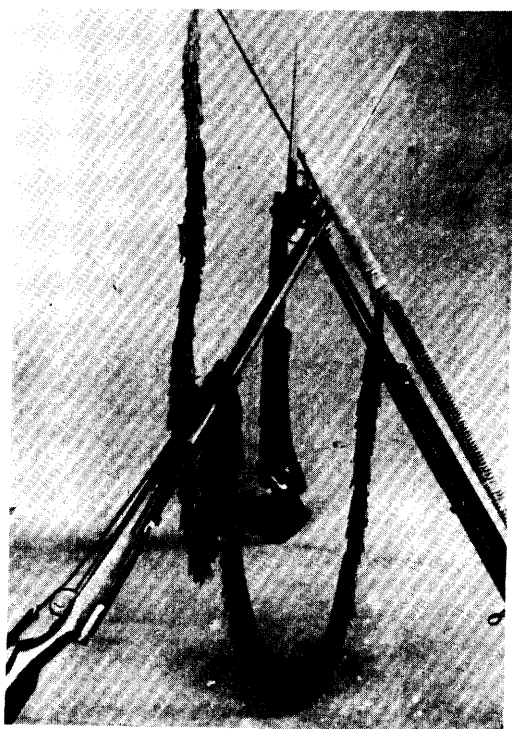
——優秀な旗手が次々戦死——

東辛荘の戦い

東辛荘の戦いで連隊旗手、三木嘉六少尉（度会郡玉城町田丸出身）が戦死したことはすでに述べた。これは、だいぶあとのことだが、「三十三の軍旗は兵隊の血を吸う……こんなことがいわれた。日露戦争以来、たびたびの出撃でほとんど原形を失い、紫のフサとサオだけを残す有名な軍旗である。ところが、三木少尉を第一号に旗手になったものは次々に戦死、同事変中だけで七、八人も士官学校出の優秀な青年が戦死している。第二機関銃中隊長、のち連隊副官だった生前の島田勝巳さん＝津市大谷町＝は、「偶然のことなのでしょうが、当時は気味悪がる兵もいました」と、当時を語っていた。

三木少尉戦死のようは――。

軍旗は野田連隊長、大島副官、田中通信隊長、本部要員らとともに一番艇（装甲）に乗っていた（二番艇だったとも伝えられているが、大発艇エンジンの調子が悪くたびたびあとききしていた）こんなとき、子牙河左岸から十字砲火を浴びせられた。その一弾が艇の舷側を貫き、軍旗の菊のご紋章の下約十センチの所に命中、はじけ飛んだ竿頭が三木少尉のひたいを割り、やがて戦死した。代わって通信隊長田中嘉衛中尉が軍旗を持ち、同戦闘中護衛した。田中中尉は、同戦闘後第一中隊長となりのち奥福集の戦いで戦死している。



激雨にさらされフサだけ
となった歩兵第33連隊軍旗

南京戦ごろの旗手は佐々木市太郎少尉（和歌山県出身）だった。十二月十日、南京の前しょう陣地を突破し、紫金山第一峰を本格的に攻撃するため準備中のこと。その日は昼ごろから、何となくうつとうしい天気だった。大した敵もないようだが、時々どこからともなく流れ弾が飛んでくる。第二大隊が敵情を調べているところへ「なぜ、前進しないのか」と、どなりながら連

隊本部が到着した。水田にかこまれた小さな部落は、たちまち兵であふれた。旗護兵（軍旗を守る五人の兵）はサ銃して軍旗を安置した。佐々木旗手は、島田大尉のそばにきて、どっかりあぐらをかくと雑談を始めた。しばらくすると「うーんッ」とうめいてのけぞった。「佐々木どうしたッ」島田大尉が抱き起こしてみると、敵の流れ弾が腹部を貫通していた。腹をやられた時ほど苦しいものはない。佐々木少尉は自分でハンカチを取り出すと目かくしし、苦しむ表情を見せまいとした。軍医がかけつけ応急手当をしたが、みるみる血の色を失い、息が荒らくなった。それでも彼は、「大丈夫さ、こんな傷」元氣な表情をつくつてみせた。だが、野戦病院に下がる途中亡くなった。

佐々木少尉は士官学校出の優秀な青年で、将来は大将か大臣かといわれていた。大体、連隊旗手は士官学校出の先任少尉の優秀な者から選ばれた。戦局が進むにつれ、優秀な者が次々戦死して人材不足となつたので、少尉候補者（下士官から試験を受けて士官学校を出た者）や特別志願（幹部候補生から試験を受けて士官学校を出た者）さらに末期には幹部候補生の中から選ばれたものだった。佐々木少尉のあとに旗手だった松岡久郎少尉も戦死している。十三年八月、ガイ旋するときは伊藤武（あきら）旗手だった。



故 島田勝巳さん

島田さんは熊本県の出身だが、久居部隊だけで十五年以上も過ごした。昭和十五年からは高知の四十四連隊歩兵砲



① 故 佐々木市太郎少尉
 ② 故 松岡久郎少尉
 ③ 故 三木嘉六少尉

大隊長、同十八年七月支那派遣軍報道部付きで南京に、同十九年十月上海陸軍部報道部長となり、桂林作戦の戦況報道関係を任務とした。映画「心の灯」(昭和六年)の作者であり、ジャーナリストであった。

(十) 曉攻撃、八房を占領

——安慶屯めざし追撃前進——

八房、八里庄

東辛荘(十五日)、中趙扶鎮(十五、十六日)の戦闘を終わった連隊は十八、十九両日は南趙扶鎮で休養した。ここで連隊は、子牙河沿いに抵抗陣地を築いている敵を攻撃せよ、との命令を受けた。

敵情を調べると、当面の敵は前方約二キロの地点にある八房(はちぼう)、東賈庄(とうこうしょう)韓家頭(かんかとう)部落の線に第一線を敷き、その後方の八里庄安慶屯部落に主陣地を設けていることがわかった。

あたりは平地だが、二キロ余に伸びた一面のコウリヤン畑で見通しがきかない。部落の前方五、六十メートル百数十メートルの地点は幅三百メートルにわたって子牙河から水を引きひざがしらに達する湿地帯を設けてわが方の

攻撃接近をはばんでいる。兵力は不明だが、部落の前端、部落内には数線にわたって散兵壕、えんがし銃座を構築、さらに民家の土壁に銃眼をくり抜くなど強固な防御陣地を構えていた。

こうした敵情を検討した結果、二十日払暁攻撃をかけることに決め、第二大隊が左第一線で八房を第三大隊が右第一線で東賈庄、韓家頭をそれぞれ攻撃することにした。東辛荘で損害を出した第一大隊は予備隊として軍旗護衛を命じられた。

行動は十九日深夜から起こした。まず、左第一線に展開した第二大隊（三浦俊雄少佐）は暗夜、しかも困難な地形を突破し、連隊砲主力のもと午前八時半には第八中隊（田沢博大尉）が第一線で突入、八房を占領した。同じころ行動を起こした右第一線の第三大隊（上田孝少佐）は、友軍飛行機の爆撃と配属された連隊砲中西小隊の協力で、同じころ東賈庄を奪取した（第十二中隊長、加藤英雄大尉戦死）。第一線陣地



清水源一さん

から退却した敵は、八里庄陣の主地に拠（よ）り迫撃砲の集中砲弾を浴びせてきた。ひとまず砲火を避け、部落後方で体制を整えているとき（午前十一時半ごろ）、「直ちに八里庄を攻撃せよ」との連隊命を受けた。このとき右側方面から約百の敵が逆襲してきたので一部（奥山繁雄少尉の小隊）に東賈庄の確保を命じ、主力は八里庄に向かった。第十二中隊は韓家頭の敵を攻撃、以後連隊主力とともに行動した。主力は午後四時八里庄東側で連隊主力と合流した

が、敵の抵抗はいよいよ激しく、再び明弘暁攻撃をかけることにし、敵情地形をさぐりながら右第一線のまま夜を徹した。

一方、八房を取った第二大隊もすぐに追撃前進に移り王皮庄、張家頭の敵を連隊砲一小隊の援護射撃を得てけ散らし、午後一時二十分張家頭南方堤防に兵力を集結、午後二時さらに堤防上を安慶屯めざし追撃前進した。困難な道を踏み切って追及してきた連隊砲の援護で安慶屯を攻撃したが、敵は迫撃砲、チェコ機銃でガン強に抵抗、間もなく日没となった。

ここで、再び得意の夜襲戦法が企てられた。二十一日弘暁前進に移った連隊は午後六時半張家頭西側千坪の地点に陣取った連隊砲の一斉射撃で攻撃の火ぶたを切った。第三大隊は、十一時二十分第九中隊（野崎武夫大尉）を先頭に八里庄に突入した（野崎大尉戦死）。左第一線の第二大隊も、子牙河堤防にズラリ砲列を敷いた砲兵に援護され猛攻を開始、午後三時ごろには第一線に進出して



暁の総突撃

きた姉妹連隊の奈良三十八連隊とともに安慶屯に突入、部落内を掃討し安慶屯および八里庄を完全に占領した。

第六中隊の土居正少尉（尾鷲市中井浦）、機関銃中隊の清水源一少尉（四日市市塩浜）らも、この戦闘で戦死した。

一方、第一大隊（渡辺綱彦少佐）は、二十日午前四時北趙扶を出発、同五時南趙扶鎮に集結、連隊予備として、軍旗を守りながら第三大隊の後方を東部八房に向け出発した。途中、同九時四十分、第二、第三両大隊の中間に展開して八房を攻撃せよとの命令。主力（攻撃中、第三中隊＝浦口正造少尉＝は軍旗護衛）は、第一中隊（田中嘉衛中尉）、機関銃中隊（二分の一欠）を第一線に攻撃を開始した。だが、同十一時ごろすでに第二大隊が八房を占領したことを知り、第十二中隊とともに韓家頭、次いで王皮庄を攻撃、掃討、

さらに八里庄に

向かう途中再び

予備隊となり、

兵力を集結し

た。明けて二十

一日午前四時

半、第四中隊長

瀬古三郎中尉指

大尉 英雄 藤加
正少尉 井土
① 故
② 故



揮の二小隊が兵站守備から復帰。大隊はいぜん予備として前進中、午後一時、第八中隊と第三大隊の中間に増加し、八里庄を攻撃した。同二時五分と三時五分の二回、尹樓付近から側背に逆襲してきた敵は予備隊で撃退、連隊本部の八里庄進出を援護した。なお、第二中隊は独立任務部隊として白羊橋を攻撃した。八房、八里庄の戦闘で敵は六百の死体を残して行つたが、連隊も戦死五十九(I 2、II 25、III 32)、負傷百八十の大きな損害(第二中隊分を含まず)を出した。

(二) 空陸から攻撃、敵退却

——弾味方に、7人が死ぬ——

八房、八里庄

はじめて野戦に出た兵士にとって、最も印象に残るのが最初の交戦だ。第十一中隊三小隊三分隊長(上等兵)だった山口金六さんⅡ旧姓北端、伊勢市大世古Ⅱは、八里庄の戦闘が初めての体験だった。

連隊主力に一日遅れて天津を出発した第三大隊としてはこれが緒戦だった。

十九日夜半、連隊は行動を起こした。ヤミ夜だ。兵士たちは小銃のタマを抜き、ひそかに前進を開始した。あとでも述べるが、日本軍は日露戦争はじめ過去の教訓から、夜襲の際は同士打ちを避けるために銃のタマは全部抜いた。

あたり一帯はコーリヤン、豆畑だ。兵士たちは背たけほどもあるコーリヤンを踏み分け背を曲げて進む。三大隊は午前二時ごろ(二十日)には、東賈庄陣地の約四百mの地点に進出した。昼間の偵察では、その

付近に敵の監視兵陣地アリ、との報告だったが、すでもぬけのカラだった。(敵さん、夜襲に気づいたかな)と首をかしげたときだ。

ピューン、ピューン

文字どおりの雨あられの敵弾が飛んできた。

「伏せろ！」

山口分隊長は低く叫んだ。敵はチェコ機銃、小銃を乱射してきた。だが、深いコーリヤン畑とヤミ夜のことと敵の位置がわからない。そのうえ、初陣のこと、タマの音で距離を判断する余裕もない。たちまち、あちこちで「ウーム」「やられた！」と、おし殺した絶叫が起こる。兵たちは地面にしがみついて身動きもできない。十二中隊長加藤英雄大尉はじめ七十余人の戦死傷者が出た。だが、ここで敵に感づかれたらお



山口金六さん

しまいだ。兵士たちは弾倉がカラッポの小銃を握りしめて、伏せたまま沈黙を守る。四、五分で敵は射撃をやめた。じつと物音もたてぬわが軍に、敵は感違いと安心したようだ。兵たちは、じりッ、じりッと再び動き出した。すでに軍服はもちろん、顔も手も泥んこだ。敵前二、三百メートルまで接近したところには、東の空が白んできた。敵は、こんどは、はつきりわが方の気配をさとって、

ダ、ダ、ダ……

激しい射撃を始めた。迫撃砲弾もサク裂する。こらえにこらえていたわが方も、いよいよ猛撃開始だ。夜明けと同時に友軍飛行機の爆撃と連隊砲、大隊砲の援護射撃が始まる約束だ。

友軍爆撃機のごう音が兵士たちの後方より聞こえてきた。後方の砲兵も火ぶたをきった。みるみる近づいた爆撃機は、歩兵の頭上でつばさをひるがえすや東賣庄の敵陣地に猛烈な爆撃を始めた。だが、敵味方の距離が近すぎたためか、照準を誤った一弾が、あつと思うまもなく十一中隊の展開していると真ん中に落下、サク裂した。

「友軍にやられるな。伏せろ」

山口分隊長は、思わずどなつてコウリヤン畑にもぐり込んだが、一瞬にして七人の中隊将兵が戦死した。一時はひるんだ兵士たちもすぐ思い直し、猛火をくぐつて二、三回ずつ前進、敵陣に肉薄する。戦友の夏池勇や天野武男上等兵（伊勢市出身）が朱に染まつて戦死する。

（ちくしょうッ）

山口分隊長は、もう戦闘のこわさなどみじんも感じなかった。戦友を倒した敵に対する憎しみに、若い全身の血がカッと燃えあがつた。銃をがっちり握り直した。



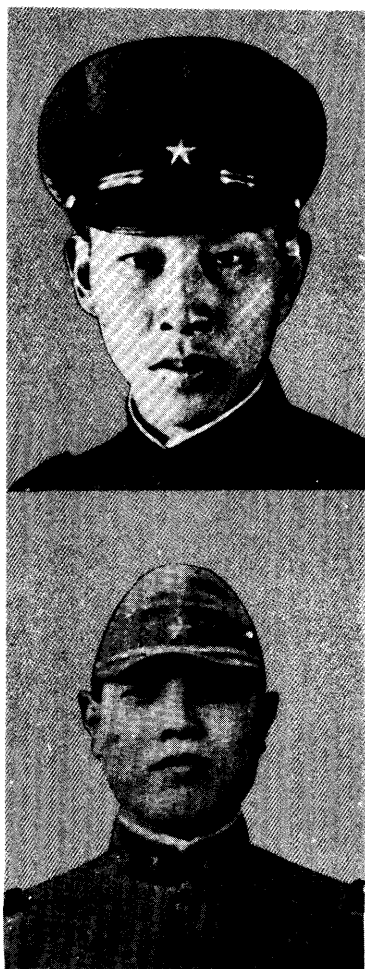
北端分隊（現在の山口さん）の顔ぶれ＝順徳で

わが軍の空陸からの猛攻撃に、まもなく敵は浮き足立ち退却を始めた。午前八時すぎには三大隊は東賈庄部落に突入、逃げ遅れた敵を掃討して回る。いったん退却した敵は、大隊が占領した東賈庄に迫撃砲の集中弾を浴びせてきたが、わが方はこれにかまわず一時砲火を避けたのち、兵力をまとめて直ちに敵主陣地八里庄に向け攻撃を続行、二十一日午後には占領した。翌日、傷だらけの連隊は新しい作戦命令に従って、再び前進して行った。

山口分隊長は戦場処理を命じられ、大隊長命令で各中隊から二人ずつ出された兵たちを指揮して、戦死者の処理に当たることになった。ポンポン船で子牙河を下ったが、すでに後方にいた衛生隊が処理してくれてあり、山口分隊長らは戦友の遺骨を抱いてすぐ本隊を追って行った。

山口さんは、十三年四月下旬済南で連隊を離れて久居に帰り、新しく編成された歩兵五十一連隊に転じた。

八月、再び



④ 故 天野武男伍長
⑤ 故 夏池 勇伍長

中支に上陸、警備の任務についた。大東亜戦争で再び召集、古巣の三十三連隊に属して比島に上陸（十七年）。

ルソン島のアラヤット山付近を一年半にわたって警備、召集解除されて帰還した。だが、二十年六月に三たび召集、高師部隊（久居で編成）に属し、鹿児島で陣地構築の任務につき人事係曹長として終戦を迎えた。

(三) 「大隊本部へ合流」

——川戸小隊、27人を失う——

八房、八里庄

川戸正巳さん（故人） 〓 亀山市 〓 は、第七中隊第三小隊長（曹長）として八房の戦闘に加わった。

第二大隊は左第一線で、二十日払暁から前進を開始した（既述）。正面の敵兵力は不明だが、八路軍の精鋭とみられた敵は子牙河の水を引いて、部落の前方に湿地帯をつくり、わが方の接近、攻撃をはばんでいる。しかも、背たけほどに伸びた一面のコウリヤン畑で見とおしがきかない。八房までは、一本の太い堤防が唯一の道だ。だが敵は、その堤防の突端にえんがい銃座（木材、土のうなどでおおったざんごう）を、部落内には数線の散兵壕を構えているのだ。

故 川戸正巳さん

明け方、空軍の猛爆と砲兵の援護射撃のもと、大隊はじ



りじり攻撃前進する。敵前約千^レの地点で、川戸小隊は先兵（部隊の前に出て警戒、搜索が任務）となった。川戸小隊は五、六人の部下と最前線に出た（小隊は数人ずつに分散して後続）。土手に伏して、頭で草を分けて進む。敵の迫撃砲が火を吐いた瞬間、四、五^レずつ前進する。火を見たときは、すでに弾丸は頭上を越えており、次の弾丸を装てんするまでのわずかな時間が前進のチャンスなのだ。頭を上げた部下の一人（名前不詳）が、たちまち「うーん」とのけぞった。「頭を上げるな」と低い声で重ねて注意したが、やられた部下を助けに出ることができな^レい。敵は水平射撃（銃をすえて地上十五^レほどの高さを撃つ）をやっているの^レで、同じ地点に弾が飛んでくるからだ。

気がつく^レと川戸小隊長らは、敵と目と鼻の先まで接近していた。薄明かりの中で、敵のささやきや話し声まで聞き取れる（しまった。近づき過ぎたようだ）川戸小隊長は舌打ちした。いつそこのまま突っ込むか、それとも、



敵のえんがい陣地

いったん引くか、迷った。だが、やはり先兵だけで突つ込むのは無謀だと判断し、「大隊本部へ合流する」

と低く命じた。士気に影響するから絶対に「下る」とはいえない。合流である。

引き返す場合の方がこわかった。敵に背を向けるからだ。案の定、敵はチェコ式機銃弾をおつかぶせてきた。本部にたどり着いたとき、川戸小隊は六十人のうち二十七人を失っていた。

一方、大隊本部もかなり混乱し、前地点よりずっと後退していた。運悪く本部の位置した地点が、敵迫撃砲の着弾



故 神戸太郎第二小隊長

地点に当たったからだ。第七中隊長、鹿兒島正幸大尉（九州出身）も負傷、成松長生第一小隊長（鹿兒島出身）が代わって指揮をとっていた。一方、右方を攻撃した神戸太郎第二小隊長（北牟婁郡出身）も戦死していた。神戸小隊長は、湿地帯で被弾し、動きがとれず、苦しみ抜き、からだで円を書いて死んでいた。やがて総攻撃で八房を占領、同日午後大隊は子牙河堤防を前進して安慶屯の攻撃に移った。

川戸小隊は、戦場そうじを命じられた。あたりは一面の湿地だ。民家の戸板をはいで戦友の遺体を置き、土手に目印の名札を立てて焼く。だが、湿地のため火の手があがらず、ついに民家一戸分をすっかりこわして燃やした。この煙を目標に敵は迫撃砲を撃ってきたが、命中しなかった。戦死した二十七人の小隊員の銃、はいのうは生存者が持つて前進しなければならない。この負担で川戸小隊は、ほとんど戦闘能力を

失ってしまった。

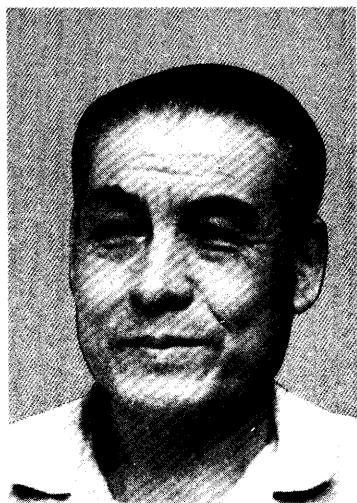
安慶屯はその日午後三時ごろ、奈良三十八連隊との協力で占領した。

(三) 敵を掃射、完全に占領

—— 9 中隊 230 人中 50 人だけ残る ——

八房、八里庄

第九中隊長、野崎武夫大尉の最期をまのあたりに見届けたのが部下の二小隊二分隊長（軍曹）だった鈴木勉さん（鳥羽市安楽島）である。



鈴木 勉さん

敵の陣地、八里庄部落は、とうとうからさらに二キロの地点にある。土べいに囲まれた部落だ。わが軍の攻撃に備え、かなり以前から部落の内外に数線の陣地を構えていた。そのうえ、子牙河の堤防を切り落として水を流し、部落のまわり百メートルから三百メートルを一面の湿地帯にし、わが攻撃をはばもうとしていた。三大隊は斥（せつ）候を出して敵情、地形を偵察の結果、比較的湿地帯も浅く、鉄条網など抵抗物も少ない部落北側から払暁攻撃をかけることに決まった。

二十一日大隊砲援護のもとに攻撃の火ぶたを切った。

（このころは大隊砲以外の重火器は戦線に到着していなかったと記憶している）野崎中隊長指揮の主力は真正面から、鈴木軍曹の第二小隊はその右（連隊の最右翼）に展開した。敵は必死の抵抗戦を敷いていた。迫撃砲、チエコ機銃を乱射、掃射してきた。土べいなど高台に火線を敷く敵に対し、わが方は援護物のない湿地帯、それに重火器がないから部が悪い。兵士たちはぬかるみに身を伏せては一步步攻めこんでいく。正午前には敵陣百余戸まで進出、突撃ラッパと同時に、

「わあーッ」

大地をゆるがす大喚声をあげ、軍刀、銃剣をきらめかせて突撃を敢行した。さすがの敵も、わが兵士たちの勇敢な肉薄にまったく浮き足だち、退却を始めた。だが踏みとどまって抵抗を試みる敵兵もあり、部落内に突入した土井一生小隊長ら多数が戦死した。

最右翼に展開していた鈴木軍曹の小隊は、部落にとりつくくと突撃の銃剣をさらに右に移した。同じころ正面城



前進 前進！

壁の敵も蹴散らした野崎中隊長は最右翼の第二小隊を気づかって、鈴木軍曹らの展開しているところにか
けつけてきた。

この時、野崎中隊長はもとより、一足先にとりついていた鈴木軍曹らもすぐ右前方に敵第二線陣地がひ
そんでいようとは、まったく気づかなかった。不意に敵銃座が活動した。

「うむッ」

兵を督励していた野崎中隊長はどっと倒れ、戦死した。鈴木軍曹はわずかに二、三メートル近くで攻撃中だった。
公報では、敵手投げ弾による戦死となっているが、鈴木軍曹はそのとき、たしか敵銃弾でやられたものと
みたのだった。

(敵に中隊長の死体を奪われてはいけない) と思った鈴木軍曹は部下を呼んで土べいの下に穴を掘り、



④ 故 野崎武夫中隊長
⑤ 故 土井一生小隊長

そこに中隊長の
死体を取りあえ
ず安置したので
あった。中隊長
の遺族は久居市
に在住。

部落内に突入
した大隊はしら

みつぶしに残敵を掃射、午後三時過ぎには完全に占領した。その戦闘で九中隊は二百三十人中わずか五十人が残っただけだった。敵の抵抗がいかにがん強だったか察しられよう。

鈴木さんは昭和九年入隊、満州警備後十一年一月除隊（伍長）日華事変で十二年八月召集、十四年召集解除（軍曹）されたが、十八年再び召集され、ルソン島開拓勤務隊、同島で終戦（曹長）二十一年いっぱい抑留され、二十二年一月復員した。どの戦闘でも真っ先にとび出したもので、日華事変・大別山戦闘の一〇三高地一番乗りは感謝状授与ではなく、当時講談社の絵物語に紹介されたほどだが、その話は別項にゆずる。

第三機関銃中隊の弾薬小隊長だった山岸実三さん（津市八丁）は東賣庄の戦闘中の印象を次のように語っている。

「弾薬運びをしているときでした。逃げおくれた老婦人とまだ若い女が死んでいた。通り過ぎようとしてふと見ると、乳飲み子がいる。その子は死んだ母親の乳房を吸っては、乳が出ないので顔をあげて泣いている。これを見たとき、じーんと胸がしびれ、しばらく立ち尽くしたものでした」

（歯） 田沢中隊長が戦死

——他3人も ダビにふし、仮墓標も——

八房、八里庄

第八中隊長、田沢博大尉は八房の戦いで戦死した。部下の上等兵、丸山正一さん（津市栗真中山町）の

上官追想記。

第八中隊は戦時編成でできた中隊（平時一個大隊は三中隊で編成）でほとんどが予、後備兵の混成中隊で現役兵はいなかった。古参兵は大正十四年兵から昭和六年兵ぐらいまで（昭和三年兵までの下士官適任者）で下士官（分隊長）は北満警備に服務した者で、除隊のさい任官した伍長だった。

中隊は久居市新町の鈴木牛乳店で編成された。中隊長は松商の配属将校だった田沢博大尉、当時三十歳ぐらい、山形県出身と記憶している。小隊長は、第一小隊が清水操（名張市出身、大別山で戦死）第二小隊が山本裕一（津市東町出身、無錫で戦死）第三が木田允之助（大別山で負傷、のち中隊長、伊勢市出身、名古屋市）それに黒田仙之助准尉（員弁郡出身、大別山で戦死）だった。九月六日「嘉義丸」に連隊砲とともに乗船、故国をあとにしたが、輸送船指揮官が田沢大尉だった。船中でも何かと部下の「老兵」のめんどろをみてくれたものだった。

十一日午後二時、太沽（ターク）に上陸、翌十二日午前五時、第二大隊は師団の進出を援護するため、先遣隊として天津（てんしん）へ向け出発した。

水路を工兵隊の大発艇で進む。東辛荘で下船し、南透荘に宿営した。前線五師団の交戦する銃声で眠れない。十四日午前三時半出発し堤防を南進する。一帯は全くの湿地帯で堤防以外は行動できない。姚馬渡付近で六十三連隊の戦



故 田沢中隊長

闘に協力するのが先遣隊の任務だった。

第五、第六中隊が第一線となり第八中隊は予備隊となった。だが夜にはいると敵大部隊から攻撃され、第一線は苦戦におちいった。田沢中隊長は第三小隊を指揮して最前線にいたが、弾薬を撃ちつくし、目前を敵にじゅうりんされていた。このため黒田准尉以下五人が決死隊となり、敵中を潜行して弾薬を補給、払暁かろうじて撃退した。これが第八中隊の緒戦であり、戦死一、負傷五の損害を出した。先遣隊を追及中の連隊主力が子牙河で急襲され、血まみれになって姚馬渡にたどり着いたのはこの日だった。

十五、十六日は戦場掃除と警備、十七、十八日は休養、故郷に第一信を書き、一緒に出征した弟の文治（第三大隊砲）と会い、互いに元気を喜び合った。（文治さんは十九年レイテで戦死）

二十日、八房攻撃を開始した。丸山上等兵は中隊の連絡兵として大隊本部にいたが、やがて大隊副官日紫喜少尉、中西美代治君ら五人ぐらいで敵弾雨飛の堤防上を攻撃前進し、敵陣に突入した。日紫喜少尉は敵二人を軍刀でたたき切った。



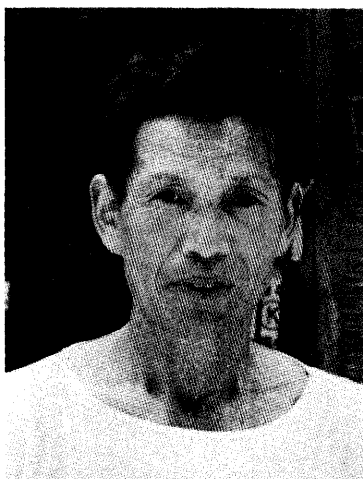
戦友のダビに敬けんな敬礼をして

だが第二線陣地から集中射撃が激しく、その場にクギづけとなり、右側方約二キロの道路を退却していく大

縦隊を見ながらどうすることもできなかった。

夜に入り、中西美代治君が足を負傷、丸山上等兵は彼を肩に負い、敵弾を避けながら約二キロ後方、南趙扶鎮の大隊本部まで退いた。帰路また負傷兵の護送を頼まれ、再び本部に引き返す。翌二十一日未明やっと本部にたどりついたが、重い負傷兵を背負ったの行動のくり返しに疲れてしまった。ひと息ついて午後二時、原隊の位置に追いついた。

ちょうど田沢中隊長が戦死した直後だった。そのときの



丸山正一さん

驚き、無念さ（ああ、どうして中隊長と行動を共にしなかったのだろう）残念だった。戦友に聞くと八房部落の奪取を命じられた中隊は、身のたけを没するコウリヤン畑（湿地帯）を二キロ程前進、八房を掃射した。田沢大尉は部落南端の寺の前で敗敵を双眼鏡で偵察中、間近に迫撃砲弾がサク裂し、戦死したという。外傷はほとんどなく、戦死したのが不思議なほどだった。

田沢大尉は沈着、豪胆な性格。酒が好きで酔えば歌って朗かだった。丸山上等兵は編成当時から中隊長の当番兵を務め、中隊本部の伝令だった。中隊長はよく、指揮官を失った部下はみじめだから指揮官を大切にせよ、といった。中隊の団結には非常に気をつけていた。常に自分から突撃の先頭に立ち、勇敢に指揮をとった。（中隊長のアダはきつと討つてやるッ）丸山上等兵は涙をふき、くちびるをかんだ。

その夜、田沢大尉以下村山金雄、蛭川、高木伍長の戦死者四人をダビにふした。全員捧げ銃のうちに。同地に仮の墓標を立て、遺骨遺品を抱いて翌二十二日、五里荘向け攻撃前進、同夜はそこに一泊。二十三日、古木伍長以下野沢、家木、松浦君らとともに中隊長以下戦友の遺骨を南趙扶鎮まで護送したのであった。

(五) 白兵戦、白羊橋を占領

——中隊長、小隊長やられる——

白羊橋の戦闘

連隊主力が子牙河沿い八房、東賣庄八里庄の敵陣攻撃のため、集結地の南趙扶鎮から行動を起こした十九日夜、第二中隊（中隊長佐々木厳大尉）は独立任務部隊として白羊部落の敵陣に攻撃をかけた。中隊長の戦死にひるまずよく部下をばげまし、任務を果たした小隊長、伊藤源五郎さん（久居市寺町）の奮戦記である。



戦闘間に「清水上等兵おられませんか？」

独立任務部隊となった第二中隊は十九日、子牙河左岸を行く本隊と分かれ、右岸に渡った。与えられた任務は、八里庄対岸の白羊橋部落付近の敵を攻撃、十里灣まで進出して、本隊の側面を援護せよ、というものだった。大隊砲一分隊二門と機関銃一小隊（四丁）の重火器がつけられた。

出発に先だち佐々木中隊長は「激戦の見込みだから、みんな故郷に手紙を書いておけ」と、部下に覚悟を決めさせた。中隊としては最初の戦闘である。現役兵たちはそれぞれ親兄弟に遺書をしたためた。古参の伊藤小隊長は（たかが中国兵、ここでやられることもあるまい）と余裕しやくしゃく、手紙を書かなかつた。夜は更け、月が沈んだ。二十日午前零時、中隊は全員軽装となり、伊藤第三小隊を先兵に前進を開始した。



故 中隊長 佐々木蔵大尉

子牙河右岸も一面の湿地帯だ。ちょうど洪水の雲出川沿岸のよう。歩兵だけならまだしも砲を伴っての行動は困難だった。歩兵は堤防の斜面を、機関銃に護衛されて進んだ。約三^キほど進んでいったん停止した。昼間の偵察で、約六百^キ前方の三軒家に敵の警戒陣地があるのを確めてあったからだ。直ちに一個分隊の斥候をだす。約一時間後、無事もどつてきた斥候の報告を聞くと、敵の兵力は大した数ではない。

午前五時ごろ、大隊砲援護のもと攻撃前進を始めた。警戒陣地の敵はあつけなく、後方の白羊橋陣地に退却、警戒

陣地を奪取した中隊は一挙に約千五百^{メートル}追撃、

めざす白羊橋陣地約三百^{メートル}前方の地点まで進出した。攻撃は午前九時から始まった。敵は約二百、部落を中心に防衛陣地を構え、迫撃砲と機関銃で激しく抵抗する。堤防の斜面に散開しているわが方はまったく援護物が無い。中隊の先頭を切っていた先兵の伊藤小隊も敵弾を浴びて思うように進めない。



故 喜早武雄少尉

やがて後方が騒々しいので伊藤小隊長がさがってみると機関銃小隊長の喜早武雄少尉と大隊砲指揮班の鳥居文之助軍曹がやられた、という。再び第一線に引き返し、じりじり前進していると、また後方で、今度は「中隊長が！」と叫ぶ声、伊藤小隊長があわててかけつけてみると、戦闘指揮中の佐々木中隊長は肩口から首にかけ貫通銃創を受け、ムシの息だった。愛知県出身、おちついて慎重に行動する人だった。

第一線の伊藤小隊より、ほんの数百^{メートル}後方の中隊主力の方が損害が大きかった。もちろん小隊も敵弾雨を浴びていた。

「やられたっ！」

兵の絶叫。部下の傍にかけつける伊藤小隊長「何だ、水筒に当たっただけだ」とポンとしりをたたたく。

「そうですかッ」

安心してふたたび銃を構えた。が、すぐがつくり膝を折り、堤防の斜面をすべり落ちた。水筒に命中しただけではなく、やはりからだにも命中していたのだった。

ついに敵陣五十メートルまで迫った。午前十時五十分、伊藤小隊を先頭に突撃を敢行した。敵も勇敢に立ち向かってきた。残る陣地にしがみついて激しく抵抗する。文字通りの白兵戦だった。一戸、また一戸と民家を奪いつつ、午後二時半ごろ白羊橋を占領したのである。

伊藤さんは大正十四年一月、守山の三十三連隊に入隊、奉天駐在を経て日華事変に参加、大別山の戦闘で負傷して帰還、大東亜戦争は久居の三十三連隊留守隊に勤務した。

(夫) 頭をあげ被弾、即死

——わからない戦場の「運」——

白羊橋の戦闘

独立任務部隊として白羊橋（八里庄対岸の部落）に戦闘を展開した第二中隊を援護した大隊砲二門の指揮が一大隊大隊砲小隊長（准尉）の川合水之助さん（故人） Ⅱ 生存中は久居市東鷹跡町に居住Ⅱにとつては初陣だった。

なにしろ幅約十メートルの堤防を残しあたりは一面の湿地だ。敵は堤防両側に散開したわが二中隊にチェコ式機銃、迫撃砲を浴びせてくる。すでに佐々木中隊長以下多数の戦死者が出ている。

砲を引っ張っている大隊砲小隊の行動は困難だった。それと未知の地形だ。堤防沿いに茂るひとかかえ

もある太いやナギが射撃のじゃまをした。

ヒュル、ヒュル

うなりをあげて敵迫撃砲弾が落下する。敵前で壕を掘れと命令されていたが、あぶなくてそんな余裕はない。川合小隊長は適当な砲陣を確保しなかった。

「A一等兵」

と手招きした。Aは上陸前の船中で、シャバでの無頼歴を盛んに吹聴し、両腕の入れズミを自慢していた男だ。川合小隊長はAに伝令を命じた。

「……」

Aは青くなって尻込みした。

(しょうのないやつ) Aはからいばりを暴露したのだった。

川合小隊長は堤防に立って双眼鏡で敵情を眺めた。このとき川合小隊長の足元で待機していた大隊砲の指揮班長、鳥居文之助軍曹(一志郡美杉村奥津出身)が堤防からわずかに頭をあげた。そのとたん、敵の一弾が頭を貫通、もんどり打って即死した。戦場の「運」はわからないものの、この戦闘で大隊砲小隊の戦死者は鳥居軍曹ひとりだった。



大隊砲の発射前



川合水之助さん

やがて川合小隊長は、敵前約四百^ヤの地点で、堤防から分かれ、民家が一軒立っているのを発見、砲二門をそこに進出させた。大隊砲は口径七十五^ミ、二千^ヤ以内の命中率がよく、野砲とほとんど同等の威力がある。だが、ここでは敵との距離わずかに四百^ヤ、川合小隊長は「掃射」に決めた。掃射とは、一発ごととに落下地点を少しずつずらしながら（転輪一回転）つまり夕立ちの降りはじめの雨足のような集中砲火を浴びせることである。

「右へ掃射、転輪ひとつ、各個に撃て十発！」

川合小隊長は命令をくだした。ドカン、ドカン

耳をつんざく猛火だ。小隊は持ち弾を残らず敵陣にぶち込んだ。これで敵陣はどぎもをぬかれ沈黙、すかさず歩兵が突撃、白兵戦のすえ、白羊橋を占領したのだった。

まもなく幡野大尉（のち大別山で戦死）が、中隊への連絡がてら船で弾薬を補充してくれた。なお久居市戸木狐塚の谷口信夫さん（故人）同市幸町の宇留田勇さん（故人）も川合さんの部下だった。

川合さんは大正十二年兵、十三年五十一連隊入隊、昭和八年満州駐在、十年帰還、ついで支那事変に参加、連隊とともに十四年がい旋。この間四人の部下が戦死。大東亜戦争は中部三十八部隊で久居に勤務した。

さて、白羊橋を占領した二中隊はすかさず追撃に移り、二十日夜は付近で露營、二十一日も追撃を続け、正午ごろ無名部落で敵と交戦中「本隊に合流せよ」との命を受けた。

大隊砲、機関銃の援護のもと、敵前を撤退、同夜半南趙扶鎮（なんしょうふちん）まで下がって本隊に合流した。この戦闘で敵の残した死体約百を確認したが、中隊も中隊長はじめ戦死七、負傷二十四の損害をだした。だが主力も八里庄を占領、中隊は側面援護の独立任務を完全に果たしたのだった。

なお、戦死した佐々木中隊長に代わり、一小隊長、堀内少尉が指揮をとったが、翌日負傷、石家莊で補充の日比中尉が就くまで伊藤源五郎三小隊長が代行した。日比中尉も句容で戦死、以下川村、加藤、阿波などの少中尉が中隊長をつとめた。

(七) 不眠不休の行軍

敵銃弾さけ突入し占領――

葛里の戦闘

九月二十一日連隊はその日占領した八里庄に露營、翌二十二日朝から前進に移った。雨だった。部落を出ると、ひぎを没するぬかるみが続く。敵が子牙河をスタスタに切ったため、あたりは一面のドロ沼と化したのだ。時々深みにはまって倒れる者がある。だが行軍は急だ。兵士たちは落後すまいとぶくぶくにはれあがった足をひきずり必死に歩く。

どこまで続くぬかるみぞ

三日二夜を食もなく

雨降りしぶく鉄かぶと

当時はやった「討匪行」（関東軍参謀部・詞）の歌そのまま、携行食糧はわずか二、三日分、連隊の進撃が早いうえ、途中の道路がドロ沼と化しているため、食糧の補給はとだえたままだ。飯ごうのすみに残った米をドロ水でとき、あるいは乾パンをかじってわずかに空腹を満たす。そして無名部落にたどり着いては硝煙の残る民家の土間にゴロリと横になり眠った。

太沽に上陸以来わずか十日だが、この間、炎天下の急行軍と湿地帯での不眠不休の戦闘で将兵は疲れきっていた。ひや飯と水を流しこんでは翌朝また暗いうちから出発する。きょうもまたぬかるみの中だ。しかも敵はこの水の中に手投げ弾を針金で結んで沈めていた。ひとりの兵が、この針金に足をひっかけると続く兵が吹つとぶというありさま。（北川藤正さん〓鈴鹿市下大久保町〓の話）緊張の連続だった。



小休止のときの兵士の姿

前衛として旅団（第三十旅団佐々木到一少将）直轄で前進していた第三大隊は二十四日朝、東零巨にさしかかった時、子牙河に沿った東馬村・葛里（かつり）に敵の抵抗線を見つけた。敵情偵察の結果正面からの攻撃を避け、上田大隊長は兵力を敵の北側にう回させた。

東に向いた敵陣には迫撃砲チェコ式機銃が無気味に光っており、しかも前面は湿地帯、まともにぶつかれば、相当の損害を覚悟しなければならない。だから敵の側背をおびやかすことにした。これを察知した敵は早くも（同九時ごろ）迫撃砲弾を浴びせてきた。直ちに攻撃を開始した。同じ佐々木少将指揮下の奈良三十八連隊（連隊長・助川静二）もすでに攻撃を始めている。付近はコウリヤンと綿畑。敵のチェコ式銃弾がコウリヤンを食いちぎってとんでくる。その中を将兵は、銃剣でかき分けるようにして迫まる。バサッ！

すぐそばを前進していた戦友が叫び声ひとつ残さず倒れる。コウリヤンで視界がさえぎられているため、姿勢を高くして目標を指示しようとした軽機銃手がのけぞる。予想どおり、敵はがん強だった。だが、午前十一時過ぎ、主力は激しい火戦をおかして突入、占領した。

昼過ぎになって、東西南方向の敵が逆襲してきたが、たちまち撃退、同夜は葛里で露営した。

一方、第二大隊は同日午前八時半、杜家庄で「第三大隊に協力せよ」と連隊命を受けた。直ちに出発、午前十時には西零巨に達し、第三大隊の右翼から東曹の敵に攻撃をかけた。だがこも一面ヒザを没する湿地、敵前約四百メートルの地点で一時クギ付けになってしまった。戦況はいっこうはかどらず、ついに連隊長命で日暮れから転進を始め、午後九時西零巨に兵力を結集、すぐ前進に移り、午前一時半（二十五日）連

隊主力に追及、以後は旅団予備となつて堤防上を張溝向け追撃した。この日の戦闘で戦死十四（II 6、III 8）負傷三十五（II 15、III 20）の損害をだした。こうして主力は二十五日午前九時には葛里にはいり、第三大隊を連隊長の指揮下に入れた郷土部隊は子牙河沿いにさらに南へ南へと追撃してゆく。

このころ、京漢線と津浦線沿いに破竹の南下を続けるわが北支軍は十一日に馬廠（ばしょう）の第一抵抗線を突破し、二十四、二十五日には第二抵抗線の保定、倉洲（そうしゅう）も破り、黄河の線に迫っていた。また空軍は広東（カントン）上海をはじめ、漢口、南昌など華・南方面へも連日猛爆を加えていた。一方、二十四日蔣介石は宋美齡夫人とともに外国記者団と会見（日本の攻撃に対する中国の持久力いかんとの質問に）「戦争はいかに長く続くとも中国は無限に抵抗し得るものと信じられる。中国の実力と資源とは無際限である」と語っている。二十五日には日本は、日華事変に関する中国側の提訴についての国際連盟からの招請を拒絶した。

（大） 前進続行、敵を撃退

——ナシ食べ赤痢、次々伝染——

十五級の戦い

東馬村葛里を占領し、追撃を続ける連隊は二十七日獻県（けんけん）の八章、十五級村付近に進出した。この日、県家位庄を出発した第一大隊は左縦隊となつて二庄——羊圈村——西楊村を経て八章に向かつていた。午後四時ごろ、八章部落に進出した先兵は同部落南方の土まんじゅうに敵兵二十人位がひそんでいる

のを発見、すかさず攻撃し、約三十分の交戦で撃退、午後六時には大隊主力も集結した。直ちに連隊命を受け、付近の敵情地形を搜索しながら露営した。同夜数回にわたって敵は逆襲してきたが撃退、南方に退却して行つた。二十八日も大隊主力は八章にとどまり、第一中隊には伝庄付近を確保させた。献県方面の敵情地形を搜索しながら次の攻撃準備を整えた。

一方、連隊の右縦隊となつて、二十七日早朝子牙河の右岸堤防を劉庄向け前進中の第二大隊は、午後一時ごろ辺馬南方五、六百にさしかかった。このとき十五級西北約六百の地点から射撃を受けたが、一気にけ散らし前進を続行。さらに十五級村端の堤防に敵陣地があるのを発見した。三浦大隊長は、第五中隊と機関銃中隊主力に堤防に沿つて攻撃させ、同六時半から第六中隊と奥野小隊をして平地から十五級に夜襲させた。両部隊は同七時三十分敵陣に突入、奪取してさらに急追、劉庄に同八時に進出した。



松田雅胤さん

こうして同夜は第五、第六中隊を右第一線として警戒しながら露営した。明けて二十八日午前六時ごろ堤防上にいる第五中隊の正面に敵は逆襲してきた。だが、第六中隊の協力で猛反撃し、追っぱらった。この日大隊は、第一大隊同様に献県方向の敵情地形を搜索した。この戦場で連隊は戦死二(各大隊一)負傷九(I 4、III 5)の損害をだした。

二十七日午後四時二十分、第十中隊(横井喜代蔵大尉)は独立任務部隊となり、機関銃二小隊を配属され、董各庄

方向に前進、第一、第二大隊の中間に位置し、おもに第二大隊の戦闘に協力した。途中董各庄東南側に突入、奪取した。同夜はそのまま夜を徹し、二十八日午前四時から劉庄東側向け前進に移った。このとき前方三百^{メートル}の地点を敵一個小隊が退却して行くのを発見、行きがけの駄賃^{とばかり}とばかり急襲、撃滅した。さらに劉庄西側に前進し、敵情地形を搜索中、大隊命令によって大隊に復帰した。損害なし。

連隊の猛攻に、早くも敵は退却の気配を見せたので二十九日から追撃に移った。前衛となつて午前五時藏家橋を出発した第一大隊は同十時四十分、猷県の手前、竜家町（ろうかちょう）に少数の敵がいるのを発見、直ちに攻撃して難なく占領した。このころから急に空模様が悪化、雷雨になった。だが追撃の手をゆるめず、午後二時半には大郭庄（だいかくしょう）の敵約一個小隊をけ散らして占領、さらに同四時半には南約八^{キロ}の牛辛庄を占領、同地に宿営した。夜間、小障方向から敵が逆襲して



前進路が破壊され修理する工兵隊

きたが、ものの数ではなかった。翌十月一日には同地に進出してきた第九連隊（京都）と第一線を交代し、竜家町に引き返して連隊主力と合流、同夜は竜家町に宿営した。

竜家町に集結した連隊は、そのまま一週間同地に滞在し、次の作戦命令を待つことになった。願ってもない休養である。第一中隊の一等兵だった松田雅胤氏（六六）『久居市』の陣中日記を次に引用する。

十月一日 晴れ、午前四時起床、朝食並びに出発準備、出発時間変更のため兵器の手入れす。午前十一時林大屯に着す。宿舎は竜家町東南部。

同二日 晴れ、午前六時起床、点呼、遙拝、ならびに保健体操実施。午後三時より兵器検査（そのほか予防接種や入院患者の整理など）着々、軍容の整備にもつとめた。

駐とん地では野戦ぶろもわかせたし、洗たくも出来た。食糧も献県の占領で現地の倉庫から徴発した米がたっぷり配給された。だが、野戦病院は赤痢患者でいっぱいだった。途中食糧補給がとだえているため兵士たちは道べりに延々と続くナシ畑からナシをもぎとってくつたものだ。ちょうど食べごろ、空腹、それに強行軍でのどがカラカラ、兵士たちはむさぼり食った。世界に比類なき珍味とよろこんだものだ。（松田さんの日記）

これがいけなかった。赤痢が出た。このころは防疫給水隊がなかったから、ひとり発生すると次々伝染した。野戦病院だけでは収容しきれず、天津まで後送したほどだった。

さて、この間にも十月三日には德州が、同七日には石家荘が落ち、戦線はさらに南に下がった。十月八日、連隊はふたたび進撃を開始した。

(九)

ぬかるみの道を進撃

——食糧途絶え現地で調達——

華北の追撃

「約二カ月にわたる北支の追撃行は苦しかった」——速射砲中隊弾薬小隊、上等兵だった伊藤晋一さん(七三)——津市上浜町二の南——の話。

弾薬小隊の行軍は大変だ。速射砲用のさん弾、てっこう弾、照明弾、信号弾十二発詰め鉄箱二十四箱を一車両に積み、馬に引かせて進む。小隊の編成は四車両(馬四頭)で、これに兵十四人(二個分隊)がついている。華北の道といえは子牙河堤一本だけ。敵がいたところで堤防を切断したため、付近のコーリヤン畑は湿地帯と化している。しかも華北は雨季だった。毎日雨、雨……。頼みの子牙河もひぎを没するぬかるみ、路床は岩石の如く固いが、路表二十センチぐらいは雨水を含むと泥土をこね上げたようにどろどろとなる。よくすべる。馬もすべる。足をとられる。弾はどんどん飛んでくる。足元のことだけに気をつかっているわけにはいかない。戦いの中の進撃である。倒れる馬の代わりは兵がしなければいけない。しかし荷は三百七、八十キ(約百貫)はあるから人力ではとても続かない。空腹、疲労に加えて、泥沼行軍で足がぶよぶよにはれ上がっている、なおさら苦しい。部落を見つけると、さっそくロバやチャマを徴発する。しかしこの種の馬は力も弱く上、粉ひきに使われているため、一定場所をぐるぐる回るクセがある。これにはたまげたものだった。

第一線の歩兵は十数^キも前を進撃している。一方大行李（食糧）の車両は、はるか後方でもたついている。だから食糧の補給はほとんど途絶えたまま。頼みの現地調達も敵の焦土戦術で、食糧はおろか古新聞一枚も落ちていない。たまに見つけた油で天ぷらを作って食べると、これが機械油でたちまち下痢、向こうの油は揮発性が少なく見たところはゴマ油そっくりなのだ。

手持ちのチリ紙は雨と泥で、とつくに使いものにならない。用便は草の葉があれば上等、たいていは手で始末し、あとは泥水で洗ってごまかした。たまには思わぬ拾いものがあつた。ナシがそれ、子牙河にはナシを満載した舟が放置されていることがある。現地のナシは汁が多くて、とてもおいしい。むさぼりくった。またむしたての支那まんじょうにありつくこともあつた。

わが軍の接近を知ると、現地民はどこへともなくさつと姿を消してしまう。部落に入ると、かまどは燃えているのに人っ気がなかった。大きなセイロの中にはニラ、

